福江市埋蔵文化財調査報告書 第1集

水の窪遺跡

1976

福江市教育委員会

福江市埋蔵文化財調査報告書 第1集

水の窪遺跡

1976

福江市教育委員会

序

福江市下大津町水の窪遺跡は昭和51年１月19日より厳寒の中に県文化課のご協力を得て発掘調査が実施されました。

この調査は県道福江崎山線建設による緊急調査という状況のなかで行なわれたのでありますが，この調査によって鬼岳東麓の溶岩台地端部に繩文晩期の遺跡が成立をみたことは，鬼岳火山活動と生活環境を考える上で誠に意義深いものがあると思われます。

このたび調査員の方々によって整理された図録を，福江市埋蔵文化財調査報告書第１集として刊行することになりましたが，埋蔵文化財の記録保存と活用とに，いささかでも貢献できれば幸いに存じます。

発刊に当り調査員正林・高野両先生をはじめ，種々のご協力をいただいた関係各位に深く謝意を表します。

昭和51年９月４日

福江市教育委員会

教育長　川　辺　　昇

例　　言

一　本書は，昭和51年早春に実施した，福江市新設県道，崎山線にかかる埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。

一　調査は，福江市教育委員会の依頼を受け，長崎県教育委員会文化課が実施した。

一　執筆担当は下記のとおりである。

第１章　調査にいたるまで……正林　護
第２章　調査概要……正林　護
第３章　遺跡の立地環境……正林　護
第４章　遺物出土状況……高野　晋司
第５章　層　位……高野　晋司
第６章　礫　群……高野　晋司
第７章　遺物（石器・土器）……高野　晋司
第８章　むすび……高野　晋司

一　本文中，遺物の実測，図作成，及び写真撮影は高野が行ったが，トレースについては，溝口美津代嬢にお願いした。

一　出土遺物は，現在，県文化課が保管している。

一　図版中，遺物には特に番号を附さなかったが，配列順序は本文図の通りである。

また，縮尺については土器は$\frac{2}{3}$，石器についても，特に指定の無いものは$\frac{2}{3}$である。

一　本書の編集は高野晋司が行った。

本 文 目 次

第１章　調査にいたるまで…… 1
第２章　調査概要…… 5
第３章　遺跡の立地環境…… 7
第４章　遺物出土状況……10
第５章　層　位……13
第６章　礫　群……14
第７章　遺物（石器）……15
　　（土器）……26
第８章　むすび……34

挿 図 目 次

第１図　長崎県行政図
第２図　遺跡位置図…… 3
第３図　遺跡附近図…… 3
第４図　地形測量図…… 4
第５図　遺物出土状況……10
第６図　層　　位……12
第７図　礫　　群……14
第８図　石器実測図（石鏃）……16
第９図　石器実測図（石鏃剝片石器）……17
第10図　石器実測図（剝片石器）……18
第11図　石器実測図（石核，石刃）……20
第12図　石器実測図（打製石斧）……21
第13図　石器実測図（磨製石斧及び打製石斧）……22
第14図　石器実測図（砥石）……24
第15図　石器実測図（石錘，ノミ形石器，敲石）……25
第16図　中期土器出土状況……26
第17図　土器拓影（中期及び晩期）……28
第18図　土器拓影（晩期）……29
第19図　土器拓影（晩期）……30
第20図　土器拓影（晩期及び弥生式土器）……31
第21図　土器底部……32
第22図　不明土製品……33

図 版 目 次

PL Ⅰ 遺跡遠景（上），近景（下）

PL Ⅱ 発掘風景

PL Ⅲ 礫群と遺物出土状況

PL Ⅳ 層序，発掘終了

PL Ⅴ 石　　鏃

PL Ⅵ 剝片石器

PL Ⅶ 剝片石器，石核，石刃

PL Ⅷ 打製石斧

PL Ⅸ 打製石斧，磨製石斧，ノミ形石器，石錘

PL Ⅹ 敲石，砥石

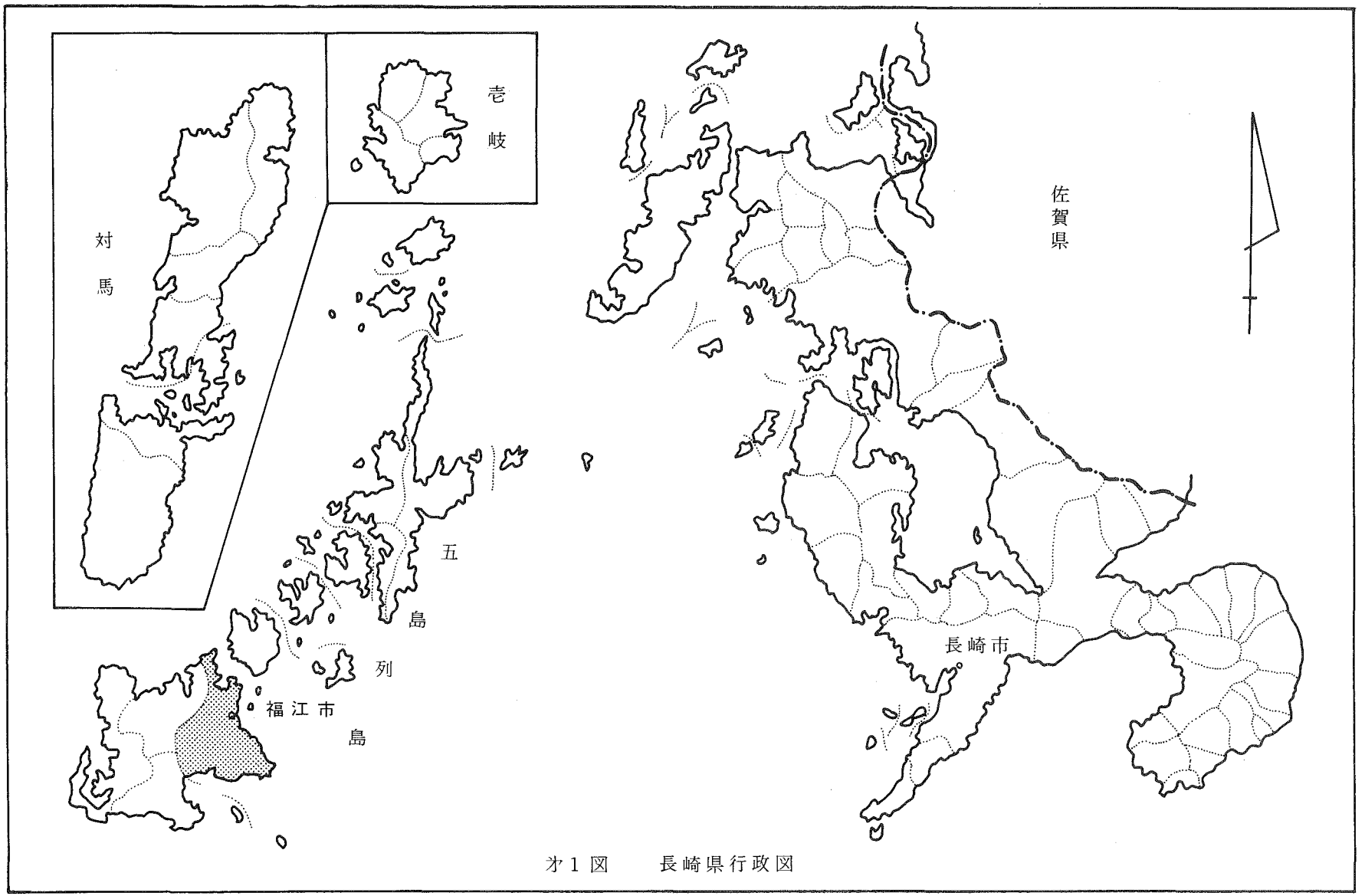
PL Ⅺ 出土土器

PL Ⅻ 出土土器

PL XIII 出土土器

PL XIV 出土土器

PL XV 出土土器（底部）



オ１図　　長崎県行政図

第 1 章
調査に至るまで

昭和49年10月，長崎県文化財保護指導委員（当時，保護指導員），下五島地区担当の松崎久磨治氏から県文化課に電話連絡があり，福江市の旧市街と同市崎山地区を結ぶ道路（福江中央線）が着工され，予定路線上に埋蔵文化財包蔵地がかかるとの報であった。

県文化課においては，当面の工事中断を関係方面に要望する一方，同課文化財保護主事井上和夫氏を現地に急派して現地の状況について実態把握につとめた。同主事及び前述松崎久磨治による試掘調査が行われた結果，人頭大の礫を径1 m程度に囲らした遺構が検出され，このまま工事が行われるとすれば遺跡の破壊は避けられず，緊急発掘調査が必要との判断が示された。

当該地点は，予定路線の中心杭No. 30の地点にあたり，文書による協議申入れを行う一方，包蔵地の取扱いについて，県文化課は県道路課・五島支庁の担当課・福江市当局・及び同市教育委員会と前後策を協議したが，当該工事が包蔵地の直接周辺まで及んでいることもあって遺跡の崩壊は避けられぬ事態となっていた。但し，包蔵地点自体についての用地交渉が進渉していないこともあって，包蔵地の取扱いについて協議の時間が十分得られたことは不幸中の幸というべきであったろう。

その後，関係方面との間で，調査対応のスケジュール及び調査経費の負担について協議が重ねられ，結果的には，昭和50年度において緊急発掘調査による記録保存を画ることとし，福江市教育委員会が事業主体となり県文化課が調査を担当して原因者（福江市）負担による調査を実施することとなった。

調査は，昭和51年１月19日～同30日，同年２月13日～同19日の計19日間，県文化課指導主事正林　護・同課文化財保護主事高野晋司の担当で実施し，福江市在住の県文化財保護指導委員松崎久磨治氏の応援を得て実施された。

遺跡の名称は当該地点が福江市下大津町山口（通称水の窪）にあるところから関係者協議のうえ，水の窪遺跡と命名された。発掘調査終了後，整理は県文化課において昭和51年８～９月実施されたが，遺跡の発見から，以後の協議，調査の実施に至るまで関係者の間で行われた協力関係は特筆されてよい。特に松崎久磨治氏には終始協力いただき，福江市教育委員会の方々には，厳冬の調査現場での直接参加に至るまで辛苦を共にしていただいた。記して感謝の意を表したい。同時に，当該工事の策定時点まで関係者の資料提供と協力がさかのぼり得ていたならば，遺跡自

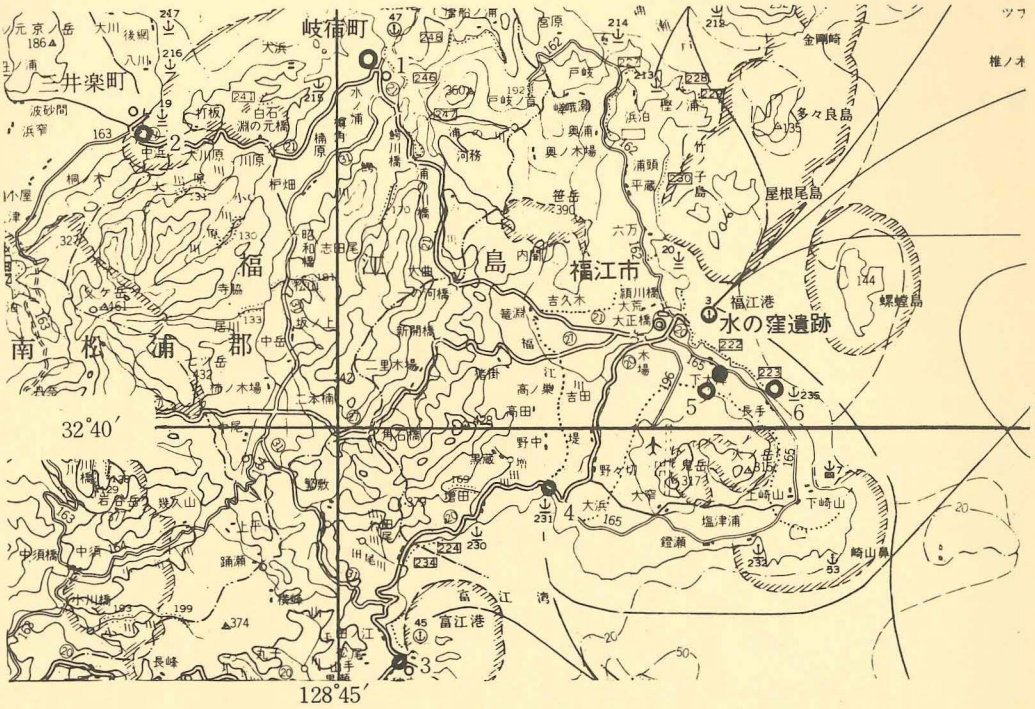
体の保存まで協議できていたであろうことは，今後に残されていく課題であろう。

調査関係者（順不同・敬称略）

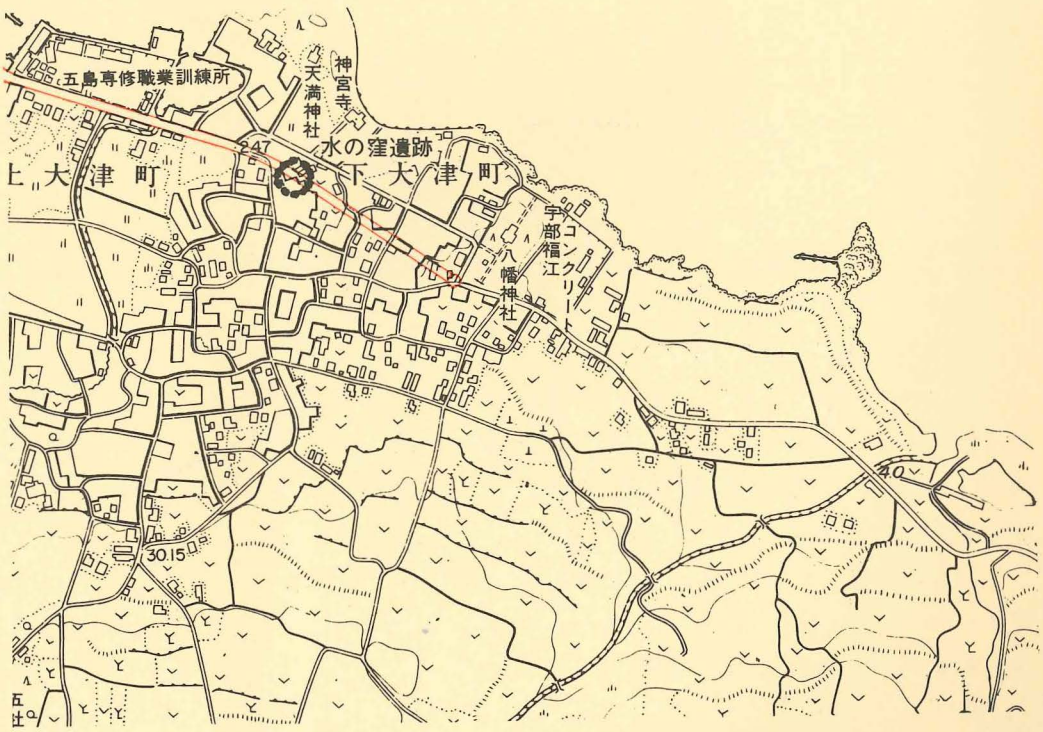
県文化課　　正林　護・高野晋司
県文化財保護指導委員　松崎久磨治
福江市教育委員会　　平田乙吉

整理参加者

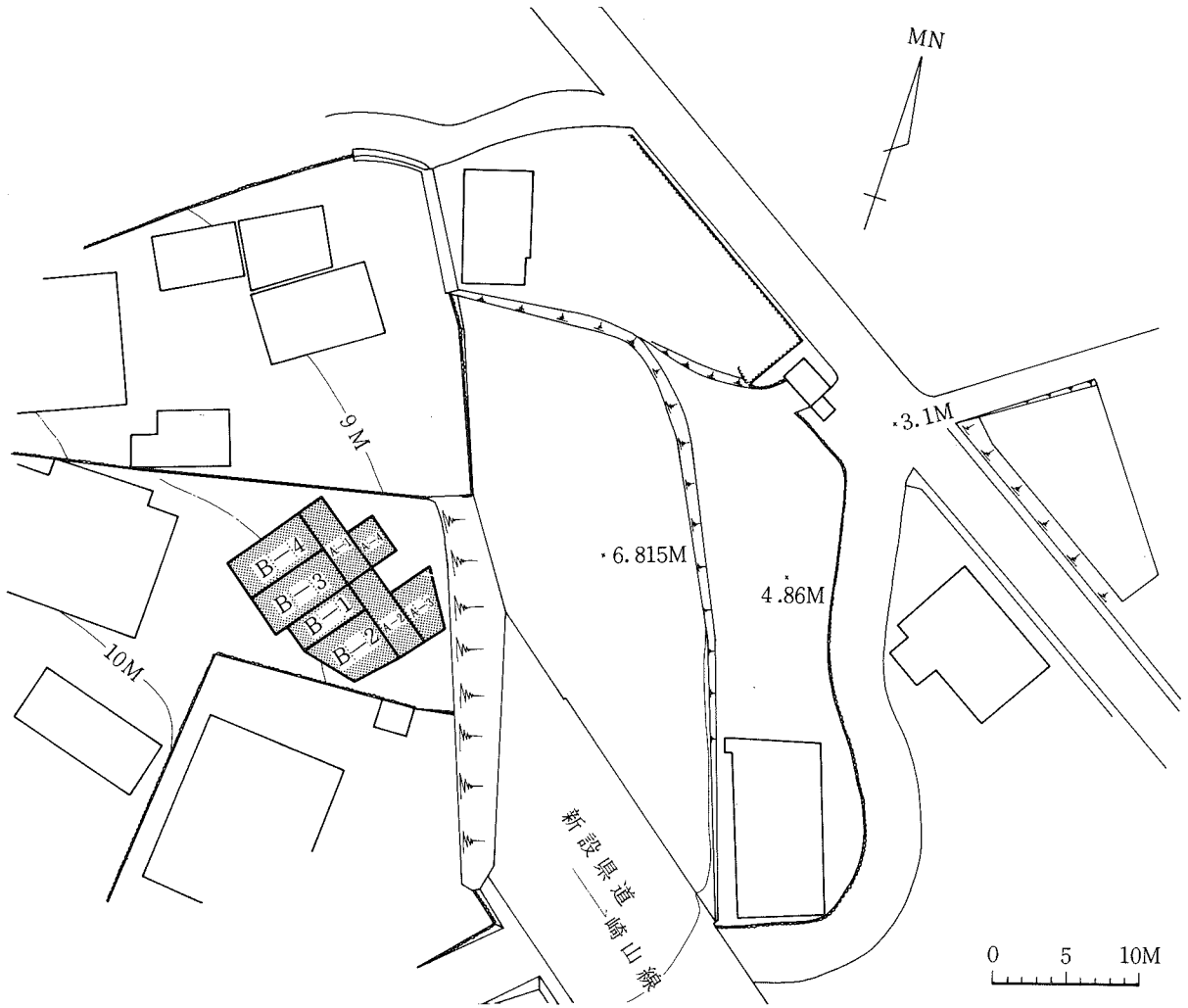
福田康平・溝口美津代・村山由美・坂本和子



第２図　　遺跡位置図　縮尺 $\frac{1}{200000}$



第３図　　遺跡附近図　縮尺 $\frac{1}{10000}$



オ4図　地形測量図

第２章　調査の概要

長崎県福江市下大津町所在の水の窪遺跡に関する緊急発掘調査は，昭和５１年１月１９日から同月３０日までの１２日間及び同年２月１３日から同月１９日までの７日間，計１９日間実施された。離島までの往復所要時間のロスを考えれば，前半，後半に調査を分けることの愚は当初からわかっていたが諸般の理由で，この運びになった。にもかかわらず叙上の日程をこころよく承諾していただいた福江市教育委員会の寛容をまず謝したい。

調査は叙上の点に加えて厳冬時期でもあり，現に雪のためかなり調査の進行が停滞することもあったが調査が予定通りのことを完了し得たのは調査に当った人々の努力もさることながら福江市当局及び同市教育委員会の職員さらには数々の利便を与えられたうえに，直接，調査に加勢いただいた県文化財保護指導委員松崎久磨治氏に負うところが多大であった，記して感謝申上げる。

調査対象となったのは前述の場所であるが現地は鬼岳の溶岩が北方及び東方に流出して形成した平滑な溶岩台地の東北辺端にあたり，標高約10mの旧海岸線に面している。福江市を乗せる福江島の東半は鬼岳を中心とする小規模火山の影響によって大なり小なり現地形が形成されている。福江旧市街が開ける島の北東部は，なだらかな鬼岳の傾斜面に続いて，現在の下，上大津の低位溶岩台地によっておおわれ，上位の溶岩台地は標高 100m以下の平たんな地形をなして坂ノ上台地等が開けて現在福江空港が開設される条件をみたしている。福江市街はこの溶岩台地を開析した福江川流域に開けたものであるが，古来，縄文時代以降の遺跡の立地を規制する重要な役割を担っている。福江市街から，南隣の南松浦郡富江町の乗る溶岸台地の海岸部には有力な縄文遺跡が立地しており水の窪遺跡の乗る低位溶岩台地一帯にも江湖(えご)貝塚（縄文前期）等すぐれた遺跡が点在している。但し，これらの遺跡と地形の関係についての論考は稿をあらためねばならぬが水の窪遺跡の時期と遺跡内容については当初不明であったため興深いものがあった。五島列島においては遺物（表面採集）はともかくとして縄文各期の遺跡が十分研究にたえるだけ調査されていなかったからである。その点で，水の窪遺跡は組織痕土器をもつ遺跡として調査された結果は意義深いものであったといえる。

調査区の設定は道路中心杭の線に沿ってＡ－１，２区（計24㎡）とＴ字形に直交させたＢ－１区（10㎡）をまず設定し，順次全面に調査区を拡げ，Ａ－３区（≒12㎡），Ａ－４区（10㎡），Ｂ－２区（≒12㎡），Ｂ－３区（９㎡）計 133㎡を完掘し得た。土層及び包含層については当

該項でのべるが，戦時中の防空壕や戦後の宅地開きとその際の石溜め掘坑等のため，部分的に攪乱状態が見られた。特にA－３・４区の北東側は防空壕によって，Ｂ－３区は後世の宅地造成によって攪乱状態にあり整層状況での調査は主としてA－１・２，A－３の一部及びＢ－１・３区によらねばならなかった。従って，土層断面は，Ｂ－３・A－１・A－４の南壁を連ねた線上及びA－１区西壁で記録が進められた。

現地の土層と包含層との関係は後述のとおりであるが，標高約８mの低平な溶岩台地上に約１mの堆積があり，基盤である溶岩に直接する黄褐色の粘土層中において組織痕土器の包含が見られた。本遺跡の調査で整層状態が見られたのはこの粘土層のみであり一部縄文中期の土器が混じったのもこの層であった。このことは調査中においても終始念頭にあった点であるが，鬼岳の火山活動の影響と無関係には考え難いであろう，という問題意識である。このことはまた，鬼岳火山群の裾野にあたる海岸部に散在する縄文時代遺跡における各時期包含層の土壌土質とその成因の追求は，鬼岳火山と密接に係っていたであろう当時の人人の生活環境の復原にとって，特に重要である，そのような問題意識を点滅させながら調査は完了した。寒気と悪天候になやまされながらの調査であったがこの小規模な緊急発掘調査は五島列島における縄文晩期遺跡として最初のものであるということのほかに，敍上の問題点をうきぼりにした調査であったともいえよう。

第３章　遺跡の立地環境

水の窪遺跡をのせる長崎県福江島は九州西方海上に位置する五島列島中，最大の島であり，いわゆる五つの島の最南端の島である。五島列島そのものは現在の行政区画で長崎県南松浦郡であり，その北方にある宇久，小値賀島に連る。宇久，小値賀両島は現在，平戸島等とともに北松浦郡に属するが位置や九州本島よりの距離等よりすれば五島列島と一連のものであり「七島列島」の名称と，行政上からも同じ「南松浦郡」であることが妥当な感さえある。事実，奈良時代における行政区画つまり国郡制の制定において庇羅島（平戸島：現在平戸市）と値賀島（五島：現在の五島）は松浦郡に編入されている。自然条件や生活条件が同じであったためであり，松浦郡の物産として鮑（あわび）・螺（にし）等類似海産品が列挙されていることからもこのことは首肯されるものである。値賀の名称は，小値賀島（現在の北松浦郡小値賀町）として残っている。

五島列島における先史遺跡を概観した場合，先縄文時代以降，地域的特性を個々の現象としてはもちながら九州本島，わけても西北九州の埒外ではあり得ない。地域性が強く見られるのは弥生時代以降，特に中期以降の五島列島においてである。

押型文土器の時期以前の遺跡は九州本島部同様海岸部位において殆んど見られず宇久島の城ケ岳（細石核・細石刃），福江島の皆塚（楕円押型文土器）等の，高標高域に立地が見られる。一方縄文時代前期以降の遺跡は海岸部に限られ，出土遺物等からも海洋的特性に終始している。

江湖貝塚[註1]（前期：福江市），長崎鼻遺跡[註2]（中期：宇久島），宮下貝塚[註3]（中・後期：富江町）等の立地及び出土資料を想起すれば足りるであろう。但し，縄文晩期の遺跡は現時点では明確に認められず，本稿の水の窪遺跡はその点でも重要な意味をもつものであるが縄文前期以降の立地特性は，長崎県本土部の東支那海沿岸と同様であり，狭隘な砂嘴後背地や海岸の台地辺端部に成立している。これらの立地特性は弥生時代に入っても殆んど変化なく，生活基盤にも変化がなかったことを暗示しており松原遺跡[註4]（宇久町），浜郷遺跡[註5]（有川町），滝河原遺跡[註6]（若松町），寄神（よりがみ）貝塚[註7]（岐宿町），三井楽貝塚[註8]（三井楽町），大浜遺跡[註9]（福江市）等，弥生各期の遺跡が想起される。これらの遺跡はその立地や共伴遺物等よりして稲作を基盤とした生産社会が営まれていた跡とは認め難く，縄文期以来の生活基盤の上に成り立っていたと考えられる。五島列島においては弥生後期以降古墳期の遺跡が稀薄であるが，五島列島（南松浦郡）の北端，中通島に接する小値賀島（北松浦郡）には浜津古墳[註10]，椿山古墳[註11]等小規模な円墳がある。このことは，五島列島の地形的特性による現象

ということの他に，弥生時代後期以降におけるなんらかの社会的変動を反映しているのかもしれない。その点よりすれば福江市大津町の標高50mの溶岸台地にあって住居址を営んだ弥生後期終来から古式土師器の時期とされる橘遺跡[註12]の性格はきわめて示唆に富んだ遺跡であるといえよう。

以上概説したごとく五島列島（宇久，小値賀島を含めて）の諸遺跡は九州本島部から隔絶された位置にありながら大きく地域的埒外におかれることはなかったが，その地形的特性は多分にその内容を規制していた事実も否めず，縄文時代の生活基盤を脱し得ぬ状態にあったと考えられる。また，福江島の場合，縄文時代・弥生時代の遺跡が海岸部まで流出した溶岩台地の上に乗るものが多いが最近の調査例によれば，ローム層と直接係わる例があり，島内に群在する火山活動ないし，その影響を強く受けたと考えられるふしがある。層序の項で再述することになるが，かかる視点からも水の窪遺跡は興ある遺跡といえるであろう。

福江市の南部には鬼岳火山群があり，海上よりすれば優美な山容が眺望され，頂上部に立てば視界100％の富士型火山である。鬼岳（317m）火岳（314m），箕岳（143m），臼岳があり鬼岳火山群は成るがいずれも火山性砂礫堆積によるホマーテ型火山で，中腹標高域に湧水源が点在し，特に傾斜の緩かな北麓は耕作可能な条件を作り出している。北麓に比較的高所に橘遺跡等が見られる原因ともなっている。

現在の福江市街は前述鬼岳北麓に比較的緩い傾斜で展開する溶岸台地が標高40～50mで急激に切れ落ちている直下，15m内外の低地に展開している。水の窪遺跡ののるこの低位溶台地は，福江旧市街の南辺に展開し，一部は下大津あたりで，きわめてゆるやかに海に没し，八幡神社から江湖周辺まで有力な遺跡の立地条件をなしている。水の窪遺跡のある下大津町の天神崎は海に突出する砂嘴となっており狭少ながら後背湿地（現在水田）を擁している。低位溶岩台地辺端は，この後背湿地に面した絶好の場所であり，水の窪遺跡が成立したといえる。遺跡地点は凹凸のある溶岩台地の上に黄褐色ローム層が堆積し，縄文晩期遺物遺構の包含はこのローム層に及んでいる。このことは鬼岳火山の活動が縄文晩期以降までその影響を及ぼしていたと考えられ，自然条件は好適でなかったと考えられる。このことは同時に，近接地点にある弥生後期の橘遺跡の包含層が火山灰地土壌の直上層にあたっていた事と併せて考えらるべきであろう。福江島における遺跡の立地が海岸部に殆んど限られていることは，単に海幸に恵まれていたことのみでなく，鬼岳火山群の影響をも併せて考慮すべきであろう。

註1. 「江湖貝塚」　坂田邦洋　1973

註2. 昭和42年，長崎大学内藤芳篤氏等の調査による，報告書未刊。

註3. 「宮下遺跡」　長崎県文化財調査報告第9集　1971

註4. 註2.に同じ

註5. 小田富士雄，内藤芳篤氏等による調査が昭和42年，44年に行なわれた。

註6. 五島遺跡調査報告，長崎県文化財調査報告第2集　1964

註7. 註6.に同じ

註8. 同　上

註9. 同　上

註10. 長崎県遺跡地名表

註11. 同　上

註12. 小田富士雄氏の抄報による。

第４章

遺物出土状況
（第５図）

図は発掘区域内に於ける礫群の位置と，出土遺物のドットマップ図を重復させたものである。平面的にみると，礫群の一部は攪乱区に入っているが，深度では攪乱層の下に位置している為，そのまま図示しておいた。なお，遺物は発掘区全般にわたって出土しているが，ここでは層位的にプライマリーな状態のもののみ掲載し他は省いた。なお，層位の項でも述べたように，遺物は第Ⅱ層からも出土しているが，その数僅少にして散逸の感が強い為，大部分は省略した。従って，平面図は第Ⅲ層中の遺物が中心となっている事をことわっておきたい。又，本来なら平面図に併行して断面図をのせるべきであるが，図の縮尺の関係上，むしろ煩雑をさける為割愛せざるを得なかった。

出土遺物範囲を発掘区内でみると，Ａ－２，Ａ－３区を中心として，一部はＢ３区に拡がりをみせるが，Ａ－１区北側ではすでに範囲より外れる。又東側及び西側半分は後世の攪乱の為確認出来ない。

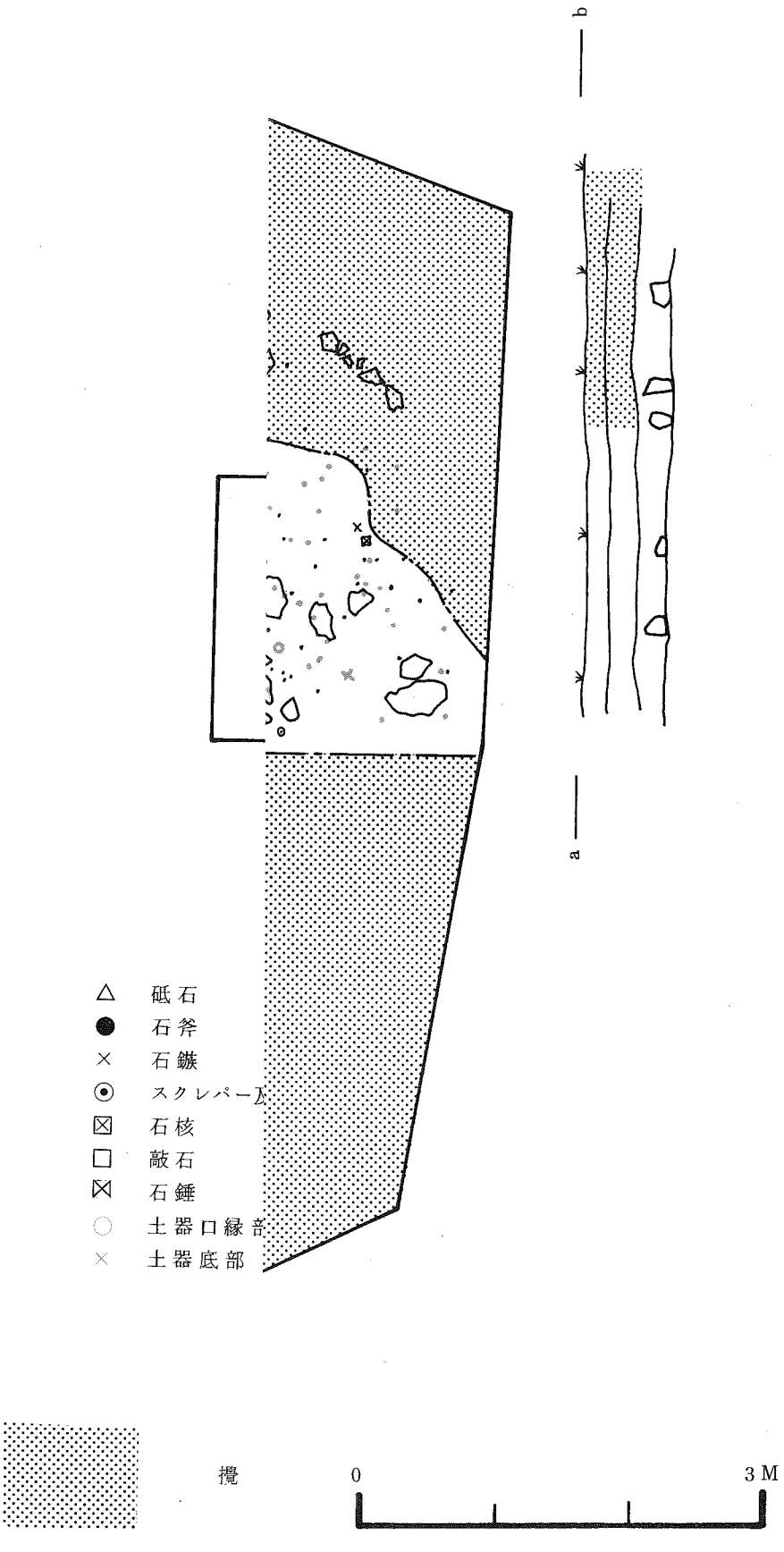
これを更に遺物の集中度でみると，Ａ－２・Ａ－３，Ａ－１・Ａ－４，Ｂ－２・Ｂ－３区の３ブロックに分かれるようである。このブロックをそれぞれＡＢＣと仮称するなら，Ａ及びＢＣでは遺物の内容が若干異なる

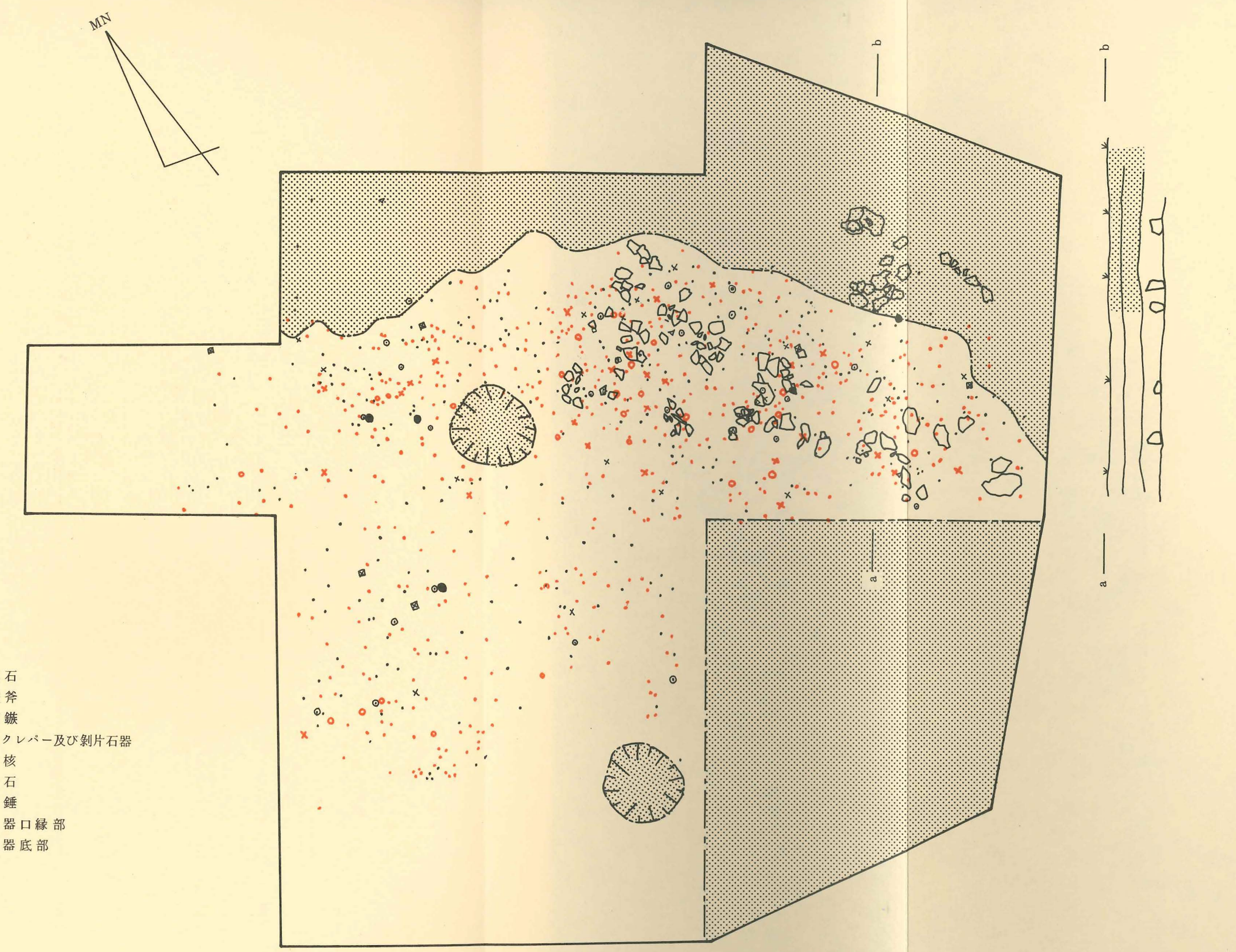
すなわち，石器では，砥石，スクレーパー，敲石，石鏃等はＡ区に多く，石核，石斧等はＢ，Ｃ区に多い。土器では，特に底部がＡ区に集約される感があり，これは礫群の位置とも一致している。使用された土器の破棄が，底部の損壊時とみるなら，上述の石器の分布状況をも加味すると，この区が何らかの重要な生活遺構の最終的な様相を示していると考えざるを得ない。この場合，Ｂ，Ｃ区はＡ区の補助的な場である。

換言すれば，Ａ区は食生活の為の直接的な作業場に対し，Ｂ・Ｃ区はその道具を作る為の場であったという理解である。

勿論，この考えには消極的な面も多々存在する。礫群の項でも述べた如く，もしこの礫群を８ケ所の石囲いの集合としてとらえられても，更に，この石囲いがそれぞれ，調理用の為の遺構であったと仮定[註1]しても，何らかの植物遺体や獣魚骨等，あるいは火の痕跡や炭火物，焼土等の直接的な証拠が検出されていないのである。又，Ｂ・Ｃ区を簡単な石器製作の場と仮定しても，その作業に伴うであろう相当量の剝片の量がＡ区に比して少ないのも事実である。

本来の礫群の拡がりや，攪乱以前の遺物の出土状況を全面的に確認し得ぬ段階での論証は，ある面では，人間行動の結果を非科学的に規制してしまうという恐れも指摘されようが，一つの仮定として理解していただきたい。只，何れにせよこのＡ区が遺跡の中心の一つであり，何らか

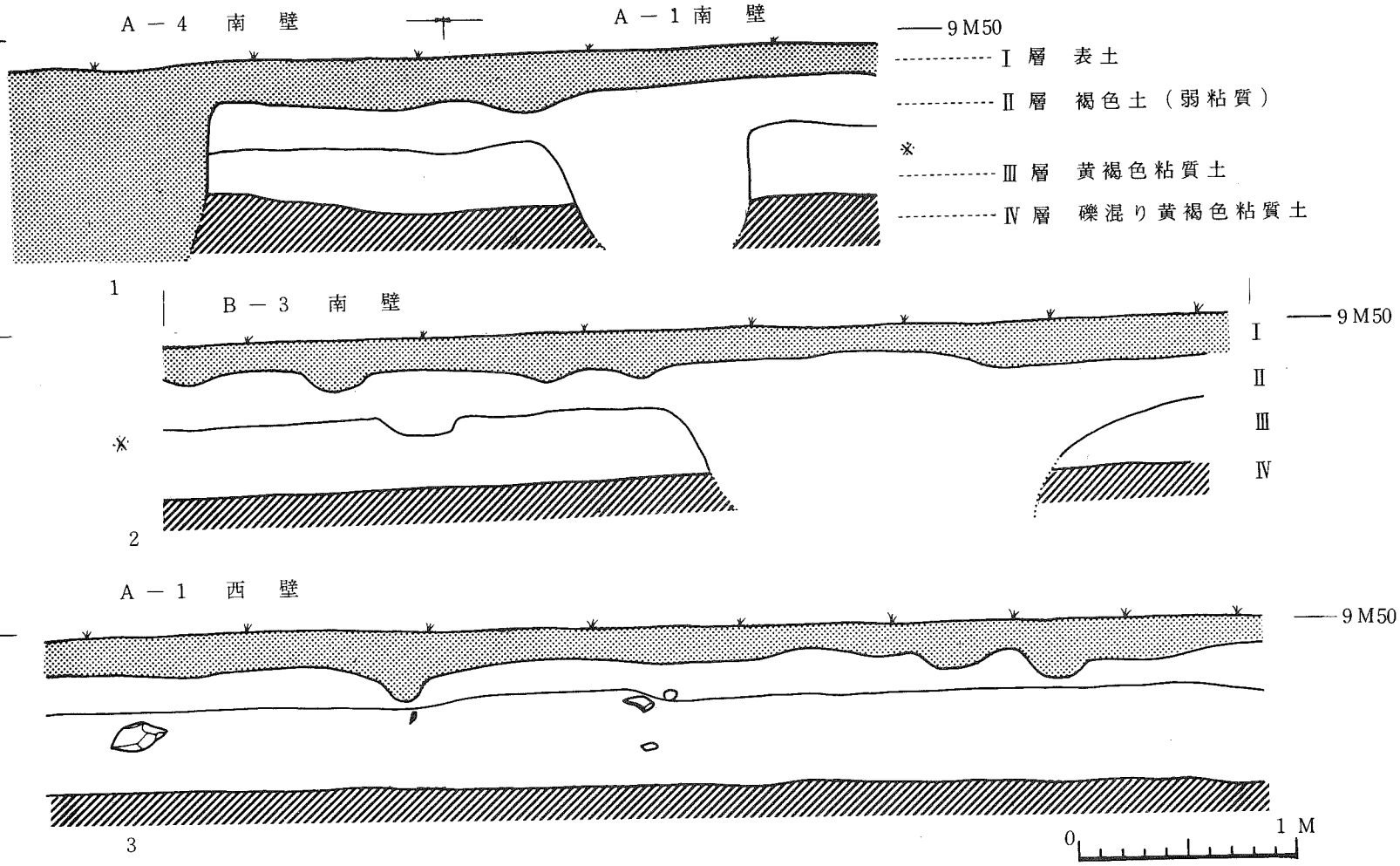

b
a
△ 砥石
● 石斧
× 石鏃
◉ スクレパー
⊠ 石核
□ 敲石
⊠ 石錘
○ 土器口縁部
× 土器底部
攪
0
3M



第5図　遺物出土状況

の重要な生活遺構である事には変りはない。

註1　数個の集合した状態での調理用遺構を考えるとすると，当然そこに共同体の集団作業場としての認識が必要となろう。しかし，今回の発掘区域内では，確とした住居址という基本的な遺構に接し得なかった為，それらの相関関係まで言及する事が出来ぬうらみが残った。


A－4　南　壁
A－1 南　壁
9M50
Ⅰ層　表土
Ⅱ層　褐色土（弱粘質）
※
Ⅲ層　黄褐色粘質土
Ⅳ層　礫混り黄褐色粘質土
1
B－3　南　壁
9M50
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
※
2
A－1　西　壁
9M50
3
0
1 M

第6図　　層　　位

第５章

層　位（第６図）

1.及び２は連続する層図で，それぞれ左側よりＡ－４，Ａ－１，Ｂ－３区の南壁である。傾斜は逆にＢ－３よりＡ－４の方へ，つまり西側より東側へ若干低くなっている。その比高は長さ10*m*に対して約20*cm*程である。

Ａ－４区で第Ⅰ層よりの落ち込みが見られ，Ａ１，Ｂ３区では第Ⅱ層よりの落ち込みPitが確認出来る。このPit内からは近世の磁器に混って寛永通宝２枚が出土している。

3.はＡ－１の西壁で，北側の方が若干高くなっているが，その差は殆ど無く，大むね平担と考えてよい。（第４図）

層位は，いずれも４層に分かれ，それぞれ第Ⅰ層表土（約20*cm*），第Ⅱ層・弱粘質褐色土（約20*cm*），第Ⅲ層・黄褐色粘質土（約30*cm*），そして第Ⅳ層礫混り黄褐色粘質土の順である。この内第Ⅲ層と第Ⅳ層の境はあまり明瞭ではないが，一応無遺物で自然の推積礫が多くなった時点をその境とした。

これらの層序中，古代遺物の出土は第Ⅱ層中からみられるが，その数は僅少であり，しかもいたる所に後世の攪乱の痕跡が見られる為，ここでは，しっかりした状態で遺物が多量に出土する第Ⅲ層を包含層としておきたい。

この層は，所謂ローム質であり，明らかに火山灰の推積した所産である。その意味については後述するが，少なく共，この時期（縄文晩期）に大量の火山灰が降下した事実は認められよう。

又，別項で述べる礫群は，その上端を第Ⅲ層中程に見せ，第Ⅳ層直上にほゞ水平にその下部を位置している。

一般的に福江島での発掘調査は例が乏[註1]しく，且つそれぞれ文化層の時期が異なる為[註2]，その層位比較が出来ないのが残念である。

註1.　下五島福江島では下記の調査例がある。

①	岐宿町岐宿貝塚	（第2図－1）	貝塚　弥生中期	長崎県文化財報告第２集1964
②	三井楽貝塚	（第2図－2）	貝塚　弥生中期	〃
③	福江市大浜遺跡	（第2図－4）	墓址　弥生中期～後期	〃
④	宮下遺跡	（第2図－3）	貝塚　縄文後期	長崎県文化財調査報告書第９集　1971
⑤	江湖貝塚	（第2図－5）	貝塚　縄文前期	坂田邦洋　1973
⑥	橘遺跡調査報告	（第2図－6）	住所址　弥生終末～古墳	小田富士雄　1973（本報告未刊）

この内⑥については，その層序は第Ⅰ層表土，第Ⅱ層黒色土層，第Ⅲ層赤斑火山灰層，第Ⅳ層黄色ローム層であり，第Ⅲ層以下は無遺物層との報告がある。

註2.　註１の例の如く，その調査が貝塚や砂に集中する感があり，オープンサイトでの層位比較が困難である。

第 6 章

礫　群（第7図）

今回の調査で検出された遺構らしきものは，この礫群以外には見当らない。図の説明と，考えられるその性格について少し述べたい。

図中，東側及び西北側は，相当の土取りと攪乱を受けている為，その範囲，形状は容易に知れない。現在残存している限りでは，南北に細長く(約5m)，大きさもある程度一定した109個の礫で形成されている。

しかし礫の石質については大きく2種[註1]に分かれる。東側にかたまった一群と，その他の大部分の礫で，前者は熔岩であり，後者はそれとは異なる自然礫である。只所謂河原石とは明瞭に異なる。

礫はそれぞれ同一レベルに在り，幾つかの小礫を除いては，互いに重なり合う事はあまりない。

この礫群の間からは，相当量の石器，土器が，集中して出土しているが，特に石器では砥石，石鏃，スクレーパーが目立ち，土器では口縁，底部の破片が顕著で，この部分にそれぞれの散布の中心の一点があるようである。

以上が礫群の概観であるが，出土遺物と絡めて少し微細に見ると，大局的には連続した一連の礫群ではあるが，小さな空間を三方よりとり囲む，直径約1m前後の8ケ所の石囲いの集合ともとれよう。

そして，それぞれの石囲いの中には通常，一寸大きめの平たい石が置かれ，砥石はその近くに見受けられる。先にあげた他の石器の位置とも考え合わせると，小さな一つの石囲いが，それぞれ独立した調理用遺構[註2]として理解出来ぬ事もない。この場合，平たい石は，物を切る台であり，敲石や砥石が周辺に散在するのも，この点からみると自然に理解し得るのではあるまいか。

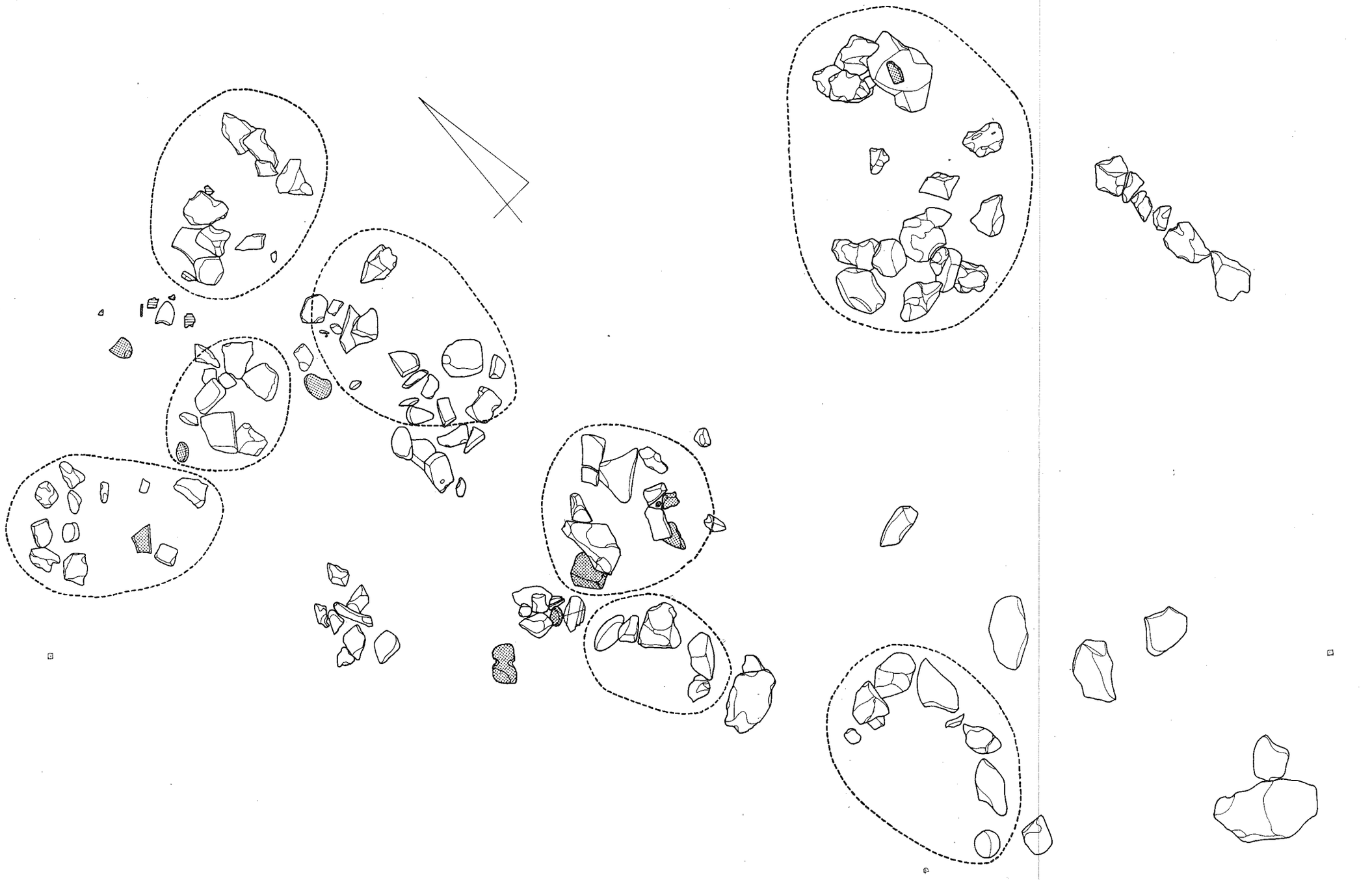
只，発掘時に於いて，これら石囲いには，何れも火の痕跡は無かったし，又焼土，炭火物等も全く見受けられなかった。

礫群の今一つの理解は，住居址，あるいは，その周縁の配石ではないかという事である。

前述した如く，周囲が相当の攪乱の為，全容は窮えないが，礫群北端部はそこで角度を変えて東側へ延びる可能性は否定出来ない。南側しかりである。只，柱穴らしきPitは附近からは全く発見されていない。

註1. この礫，及び出土石器の石質鑑定について，遂に専門家の意見を聞く機会を逸した。

2. 「野川遺跡」小田，小林　1971では礫の表面の赤化とひびに着目し，X線照射により，礫群を調理の道具として把握している。



第７図　　礫群出土状況

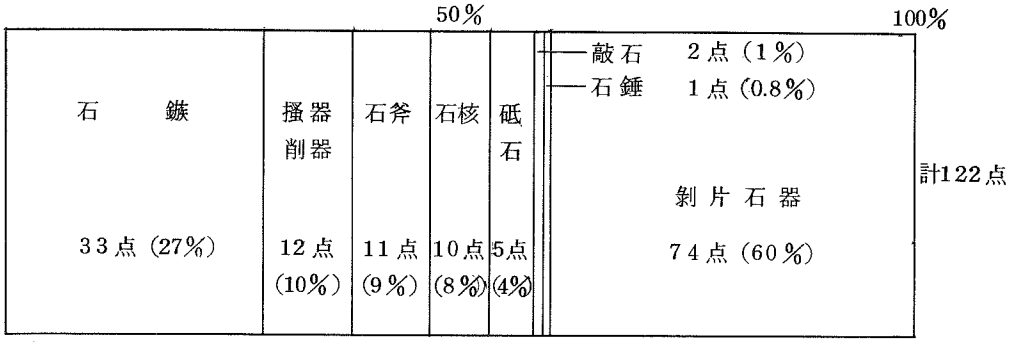
第7章　遺物

石器

（第8図～第14図，PLV～X）

石器及び石片の出土総数は903点で，内石器として認められるのは，122点である。下表1は石器数に対する種類別の百分率である。

但し相当の攪乱で遺跡自体の範囲が限定されている為，この表の持つ普編性については，ある程度蓋然性も感じられる。なお，総数及び表には，表採，表土中の資料は含まれない。



第1表　出土石器種別表

出土した石器の種類は表のとおり8種であるが，ここではその持つ意味については後述し，以下石器の簡単な説明に移りたい。

石鏃

（第8図，第9図1～7，16，17）

33点の鏃の内，ほゞ完形なのは12点，残りは先端部，基部及び脚部がそれぞれ欠損している。

石鏃の形状については，幾つかの分類が試みられているが，ここでは単に基部に抉りのあるもの（第8図1～17）基部が平担なもの（第8図20～24），基部が逆にふくらむもの（第9図3～7）ポイント状のもの（第9図5，6）そして大形鏃（第9図16，17）の5種に分類しておく。

しかし，その形状差が機能上の相違にどれ程の意味を持つかは判らないので，あくまで便宜上のものである。

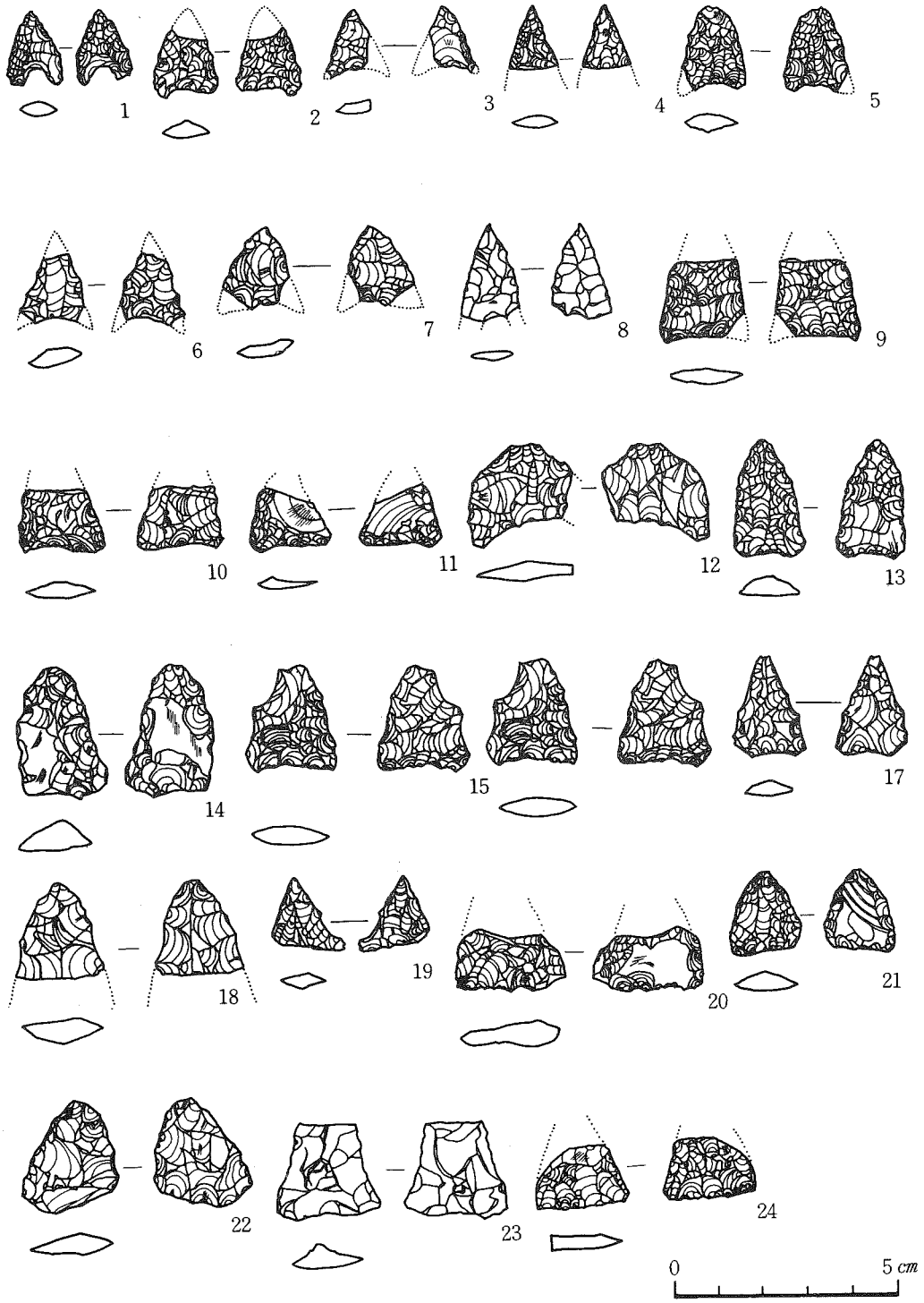
石質は圧倒的に黒曜石が多く，他は安山岩（第8図23，第9図6，16，17）である。

これら鏃の内，第8図9，13，14，18，第9図1の形状のものは，縄文後晩期に特徴的なものとの指摘[註1]がある。なお，第9図7については，調整剝離が全面的に同一時に行なわれており，当初のままの姿をとどめている。所謂逆刺用として利用されたものではなかろうか。

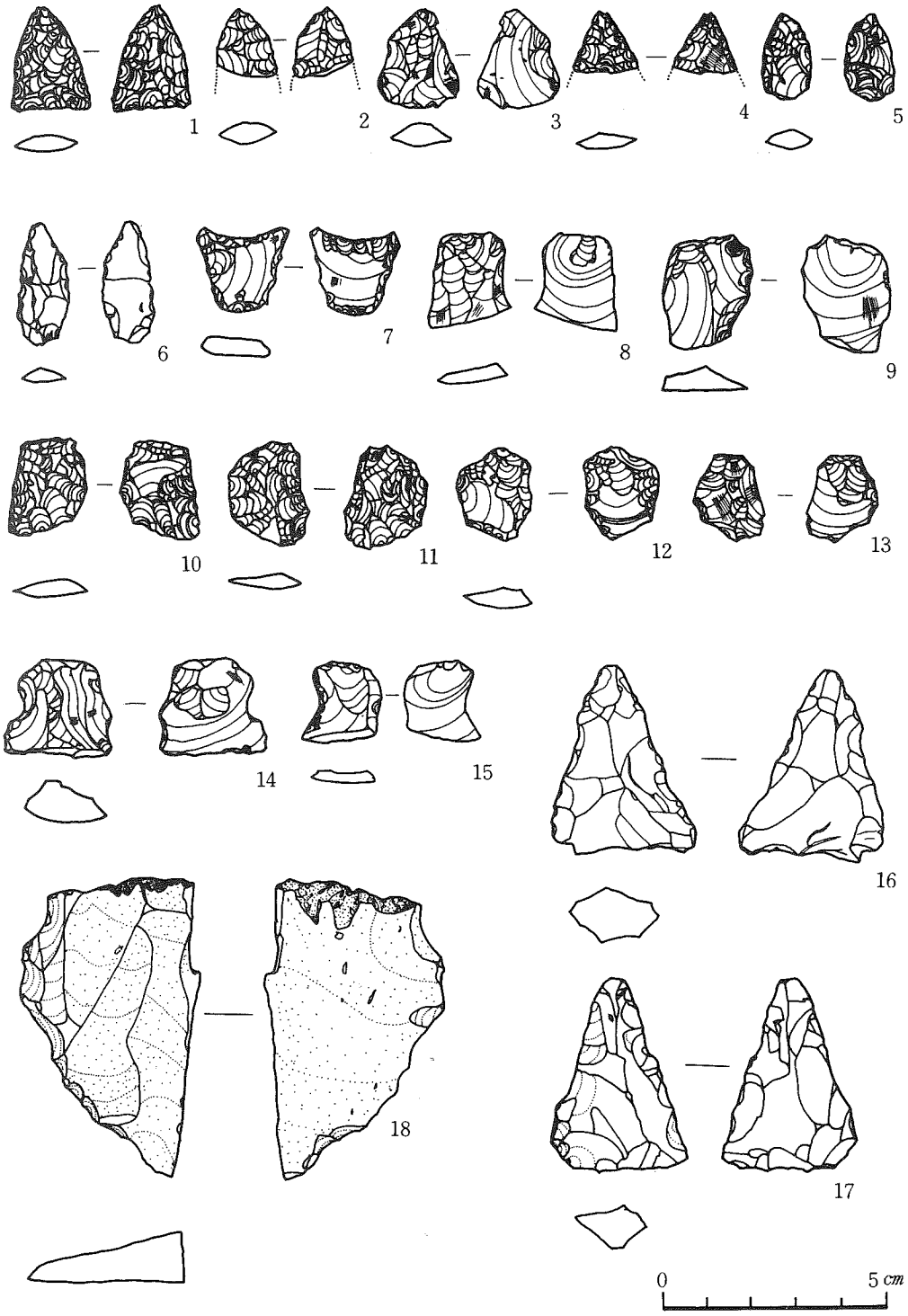
重量は大形鏃で5g，他はそれぞれ1g～2gの間である。

スクレーパー及び剝片石器

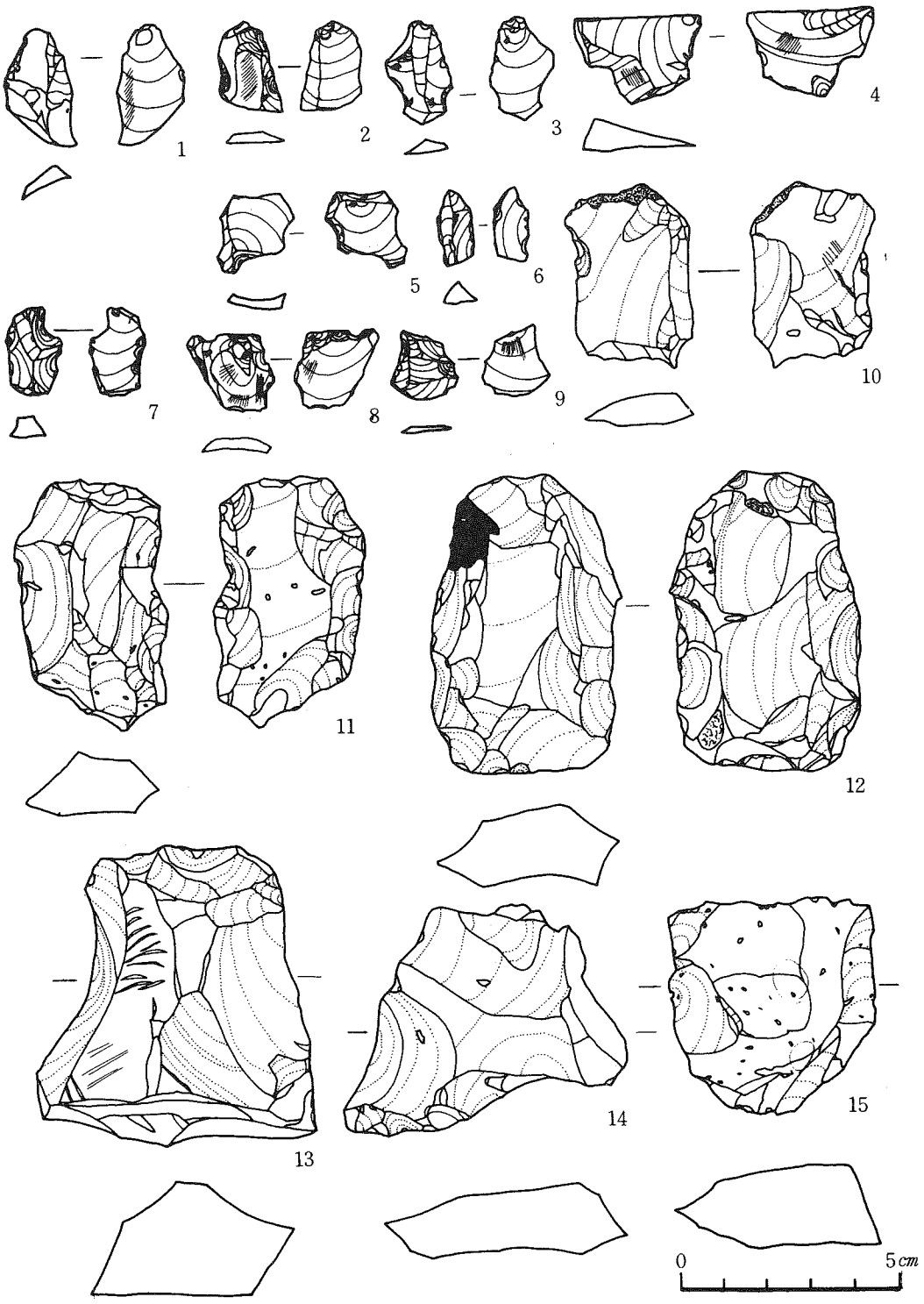
これらの内，小型のものは全て黒曜石，他はサヌカイト質安山岩である。



第８図　　石　　鏃



第9図　　石鏃・剝片石器



第10図　　剥片石器

（第9図8～第10図15）　第9図8は，縄文後晩期通有の石刃[註2]である。一定の剝離技術で剝がれた縦長剝片を利用する。10～12は全面調整を施す親指頭状の形状のもので，県内各所で見い出されるが伴出土器の明らかなものは少ない。只，長崎県諫早市峰ノ原遺跡[註3]に於いては，晩期Ⅱ式[註4]に伴っている例がある。第第10図1～9はu・fである。不定形な小さな剝片を利用し，何れも僅かながら使用痕が認められる。この種のものは，更に観察すれば，量的にはもっと増えよう。10，11，12，15はスクレーパーである。何れも，サヌカイト質安山岩で，不定形な剝片を利用し，粗い調整剝離を行って刃部を形成している。

石核・刃器（第11図1～7，8）　石核は十点出土している。何れもあまり大きくない良質の黒曜石を用いる。内，4，5は小形の角礫である。

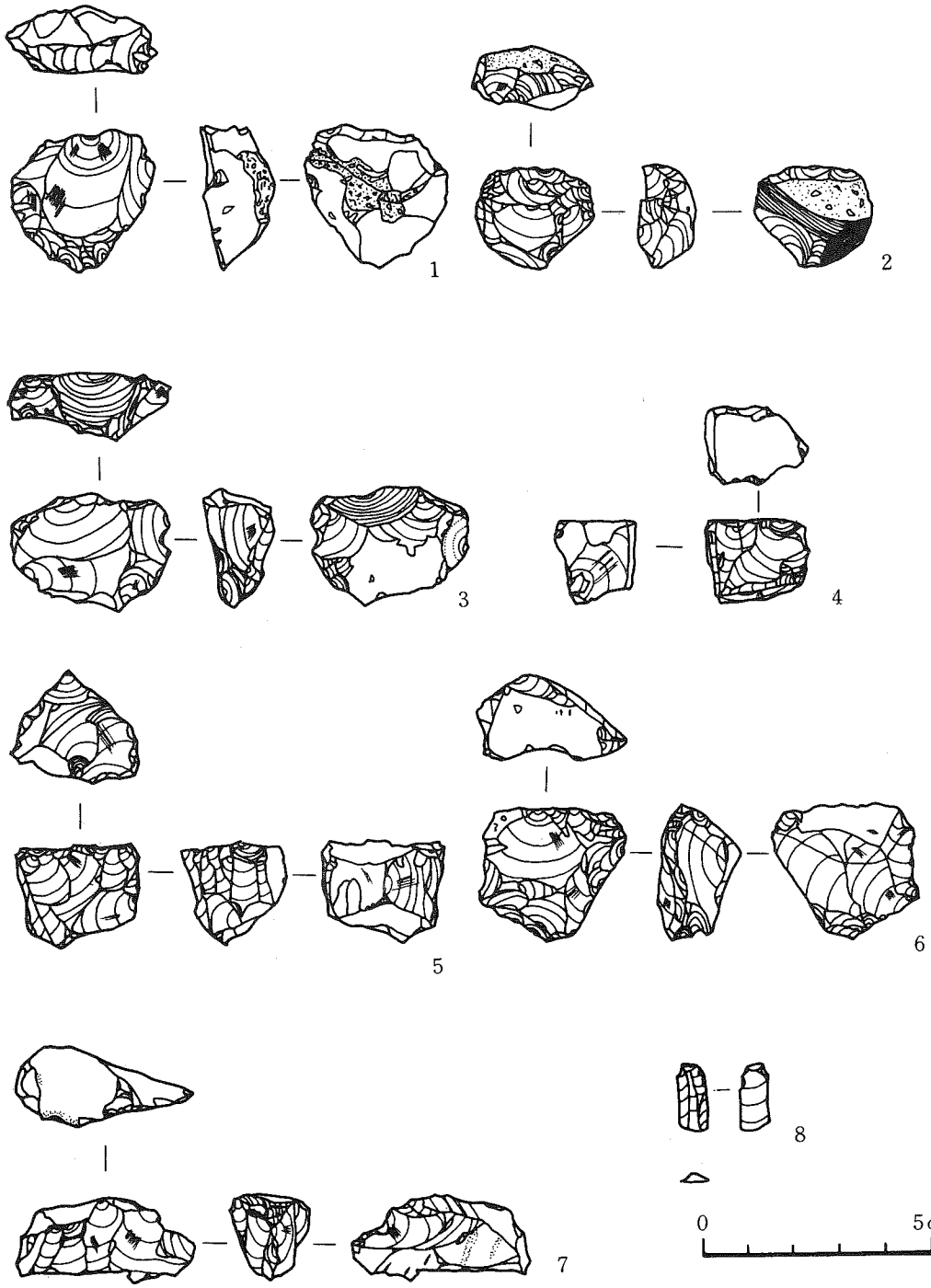
打面は上部のみにあるもの（5，7），上下両面に有するもの（1，6）そして三方以上あるもの（2，3，4）の三種に分かれる。2，3，7については，数回の打面調整がみられる。

剝離の結果生まれる剝片の形状は，1，2，5，7は縦長剝片であり他は不定形な形状である。前者は所謂後晩期石刃技法の石核であろう。

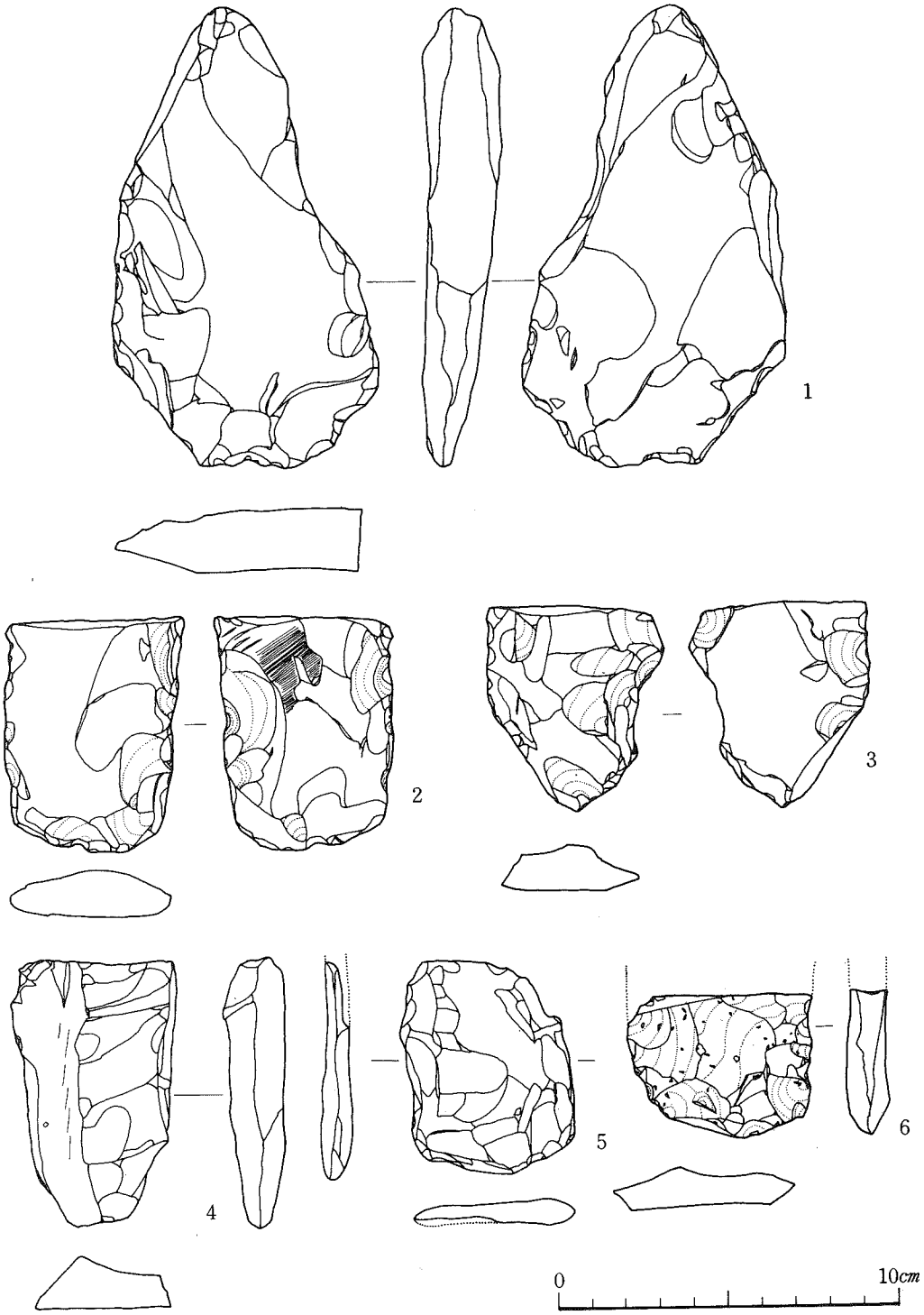
8は石刃である。2本の綾線を有し，右上部には使用痕が認められる。下部は折損している。これについては，当遺跡の近くでマイクロコアの採集がある為，当初細石刃として理解していたが，上記の石刃技法の石核より剝離したものではないかとの指摘[註5]を受けた。

石　斧（第12図，第13図）　打製石斧8点，磨製石斧3点が出土している。

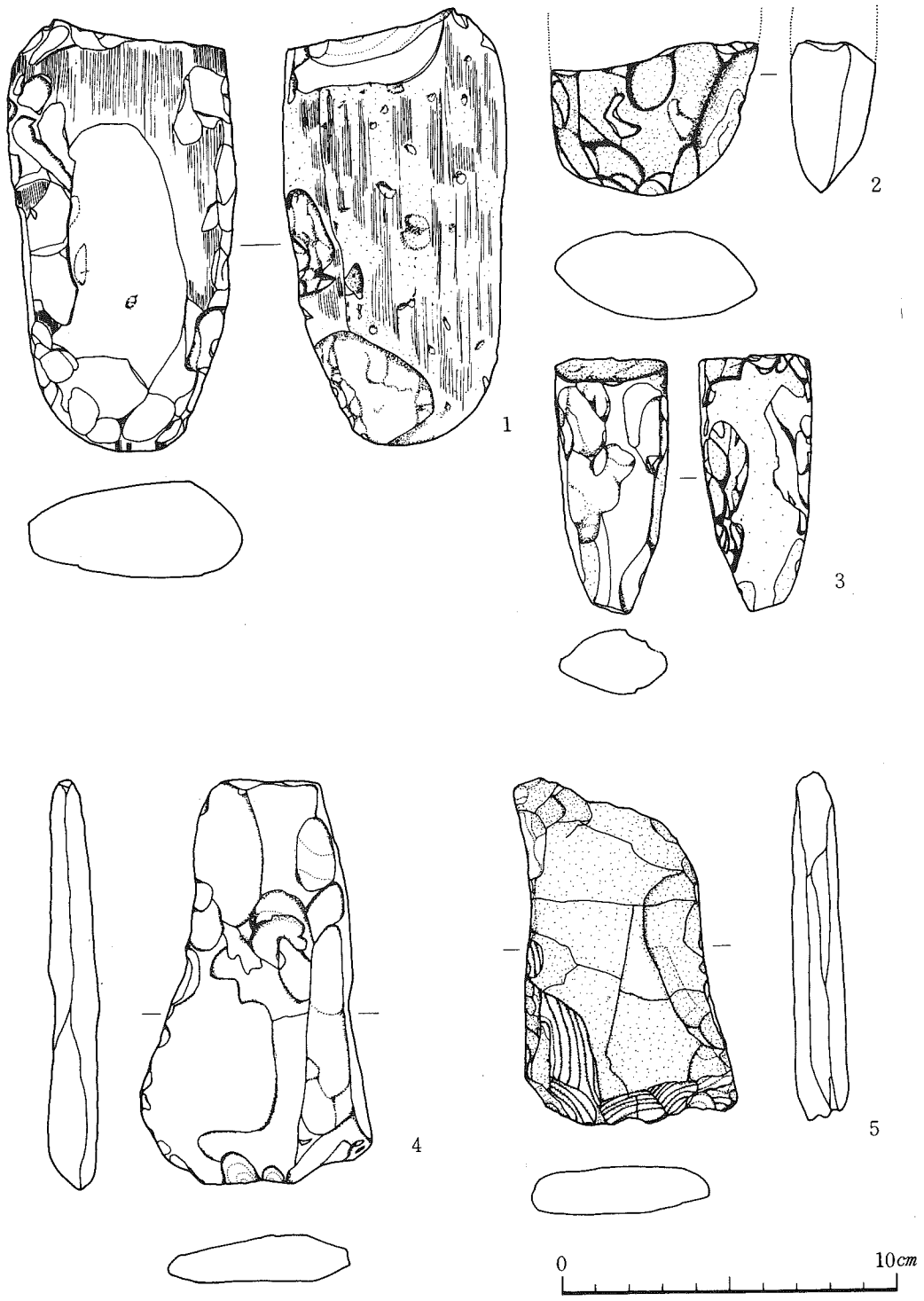
1は玄武岩製。両面から荒い剝離を加えて刃部を作り出している。一部に使用痕らしきものがみえるが詳しくは判らない。完形である。2は同じく玄武岩製。上半部を欠損しており，もともとの形状は短冊形であろう。側縁部には全体的に交互剝離がみられ，特に刃部にはその加工が入念である。3も玄武岩製打製石斧である。形は1に酷似しているが下半部を折損している。4は安山岩製である。中央部に稜線を有し断面山形となるが裏面は平坦である。上部を欠損している。5は厚さ約7㎜程度の薄い石斧である。片面が使用時に相当剝落している。形状は元来2と同じく短冊形であろう。安山岩製である。6はサヌカイト質安山岩。形状は上半部を失くした，刃部にまるみを持つ石斧に見えるが，あるいは単なる剝片石器かも知れぬ。第13図1は磨製石斧である。蛇紋岩製で，側縁に形状調整痕を残すが，全体的に研磨を施す。刃部には使用の際の打撃痕がみられる。2は磨製石斧先端部である。硬質であるが石材は不明である。部分的に研磨のあとがみられる。3も磨製石斧である。



オ11図　　石核・石刃



第12図　　打製石斧



第13図　　磨製石斧及び打製石斧

表裏共剝離痕のある部分を除いて丁寧な研磨を施している。上部及び刃部には折損面がみられる。4は打製石斧，安山岩質であるが相当の磨滅と風化をうけている。形状は分銅形である。5も打製石斧である。板状に剝離する頁岩質ものであろうが，よく判らない。表面に亀裂がみられる。刃部の調整痕は，それぞれ片面からの1回づつの打撃で作り出され，二次調整は見られない。

砥　石
（第14図）

1は完形である。目の荒い扁平な砂岩を用い，表裏の中央部には数条の使用痕がみられるが，端部は利用されていない。2は半分欠損している。片面のみ使用痕がみられるが，中央部のみ細長く浅い凹みがある。硬質砂岩製である。。3は断面長方形で，中央部左右に2条の浅い溝が走る。4にも同じく浅い2本の溝が走るが，中途で折損しており全容は明らかでない。3，4共目の荒い砂岩である。

石　錘
（第15図1）

僅か1個のみの出土である。砂岩系統の石で重量は800 g。左右両面に抉りがみられ，又一部に形状を整える為の剝離痕を有する。

石ノミ形石器
（第15図2）

粘盤岩質で，形は丁寧に整えてある。刃部は鋭く，表面はよく研磨されている。

敲　石
（第15図3，4）

何れも硬質砂岩系である。使用部は打撃の際一部落離している。

以上の石器は何れも第Ⅲ層出土のものである。

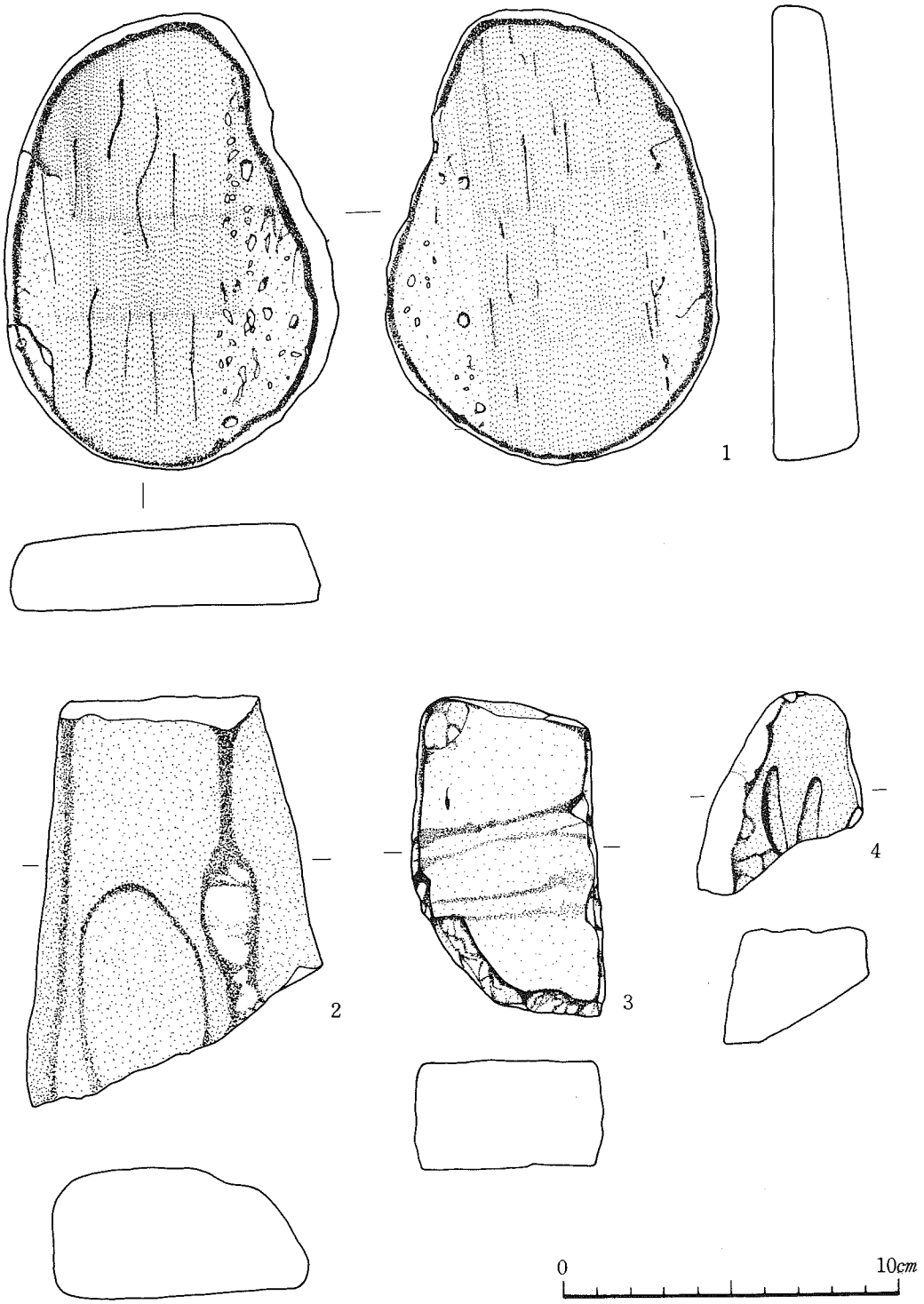
註1.　「深掘遺跡」　長崎県文化財調査報告書第5集　1967
「岩谷口遺跡群の発掘調査」　片岡　肇　1976

2.　「九州西北部に見られるサイド・ブレイドについて」　賀川光夫
考古学ジャーナル　16，17

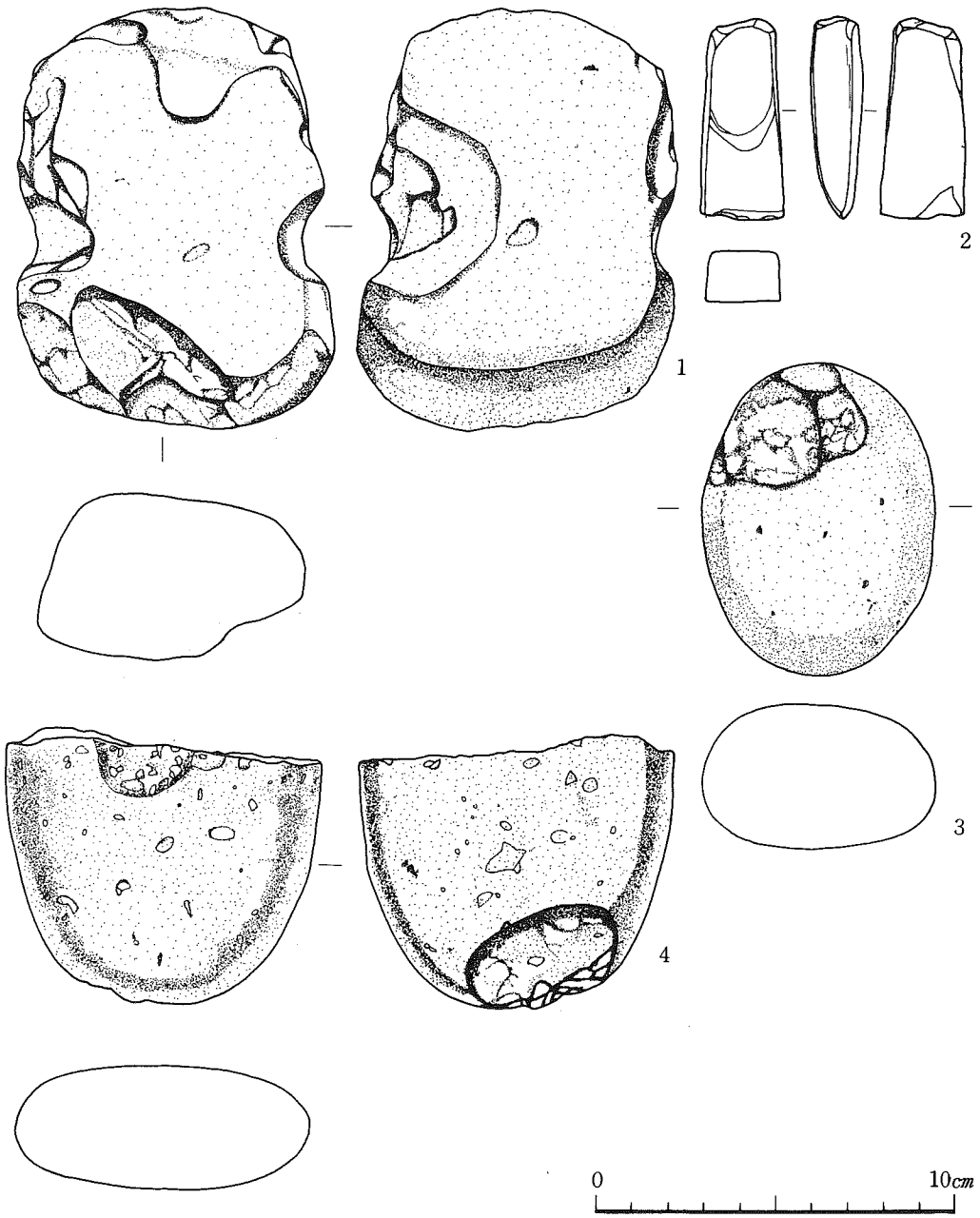
3.　「諫早北バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集図録編」　1975

4.　「新版考古学講座3」　賀川光夫　1969

5.　下川達弥氏の教示による。



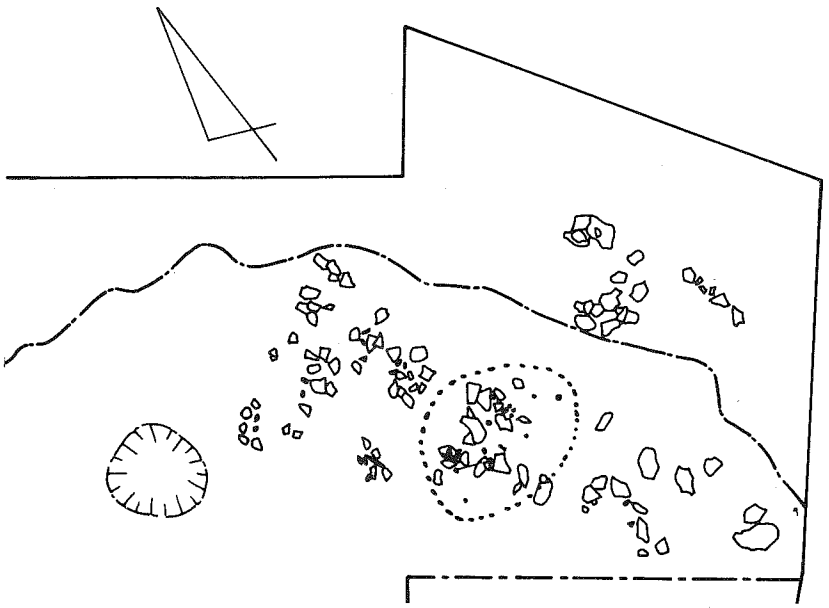
オ14図　　砥　　石



第15図　　石錘・ノミ形石器・敲石

土　器　（第16図～第20図，PL 11~15）

出土土器は大きく２時期のものを含んでいる。縄文中期のものと晩期の土器である。但し中期土器の数量は僅か18点であり，図の如く，礫群中に，それぞれかなり狭い範囲，層の厚さにして約７cmの間に散布する。



第16図　　中期土器出土状況

18点の内訳は，口縁部５点（内２点は接合），他は全て胴部であり，底部は１片もない。これらは所謂阿高式土器と呼ばれるもので，何れも胎土に多量の滑石を含み，焼成良好で色調も茶褐色と同質である。

文様構成は，口縁部で２種に分かれる。すなわち，口縁下，ほゞ平行する数条の沈線と斜行線を組み合わせたもの（第17図１，２，３）そして一条の平行沈線下すぐ幾何学文に移るもの（第17図４）の２種である。胴部については，13点の内５点は無文で残りの文様は，沈線と幾学文（第17図５，７，８）及びそれに長円形の刺突文が加わるものがみられる。太い沈線を施した裏壁は逆に何れも凹状になり，かなり強い力で施文したものと思われる。

上記口縁の内，１，２，３と４を別個体と考えれば２個の土器の残片という事になる。佐賀県坂の下遺跡[註1]の土器分類でいえば，前者は第８類後者は第５類に近いと思われるが，五島列島に於けるこの種の土器の文様構成や細かな編年が確立していない現在，考察は別の機会に譲りたい。

晩期の土器は，浅鉢，鉢，深鉢からなる。

浅　鉢　10は口縁に大きな山形状突起を有する。口縁直下で「く」の字に外側

（第17図 10～14） へ張り出し肩部を形成する。この後，更に今度は逆に内側へ向って強いカーブを描きながら底部へ移行するものと思われる。頸部には横方にヘラ状のもので整形している。口縁内側には一段，段がつく。色調は褐色。ある程度表壁を研磨している。

11，12 も10と同じようなタイプのもので，色調，胎土とも酷似するが，12については直線的な内側へのカーブはやがて頸部を経て外側へゆるい角度で張り出す。10，11 よりの多少の変化がみられる。13，14 は小型浅鉢である。この内13はタイプとしては先の10～12と同じである。

14は口縁下いったん外側へ張り出した線もすぐ「く」の字に内側へ屈接し，細い頸部へと移行する。

以上の浅鉢は晩期Ⅱ式によく見られるタイプである。

鉢

（第17図15，16） 何れも口辺部が内側へ斜行し，変化が見られない。15は，色調黒褐色胎土に多量の雲母を含み，外壁に二次的な煤の附着をみる。16は当初全面研磨していたものと思われるが，表壁のひび割れ後，一部剝落している為定かでない。色調黒褐色。

深　鉢

（第18図1～第19図11） 口辺部の傾きについては，破片の大きさが十分でない為，不明なものについては直行させておいた。

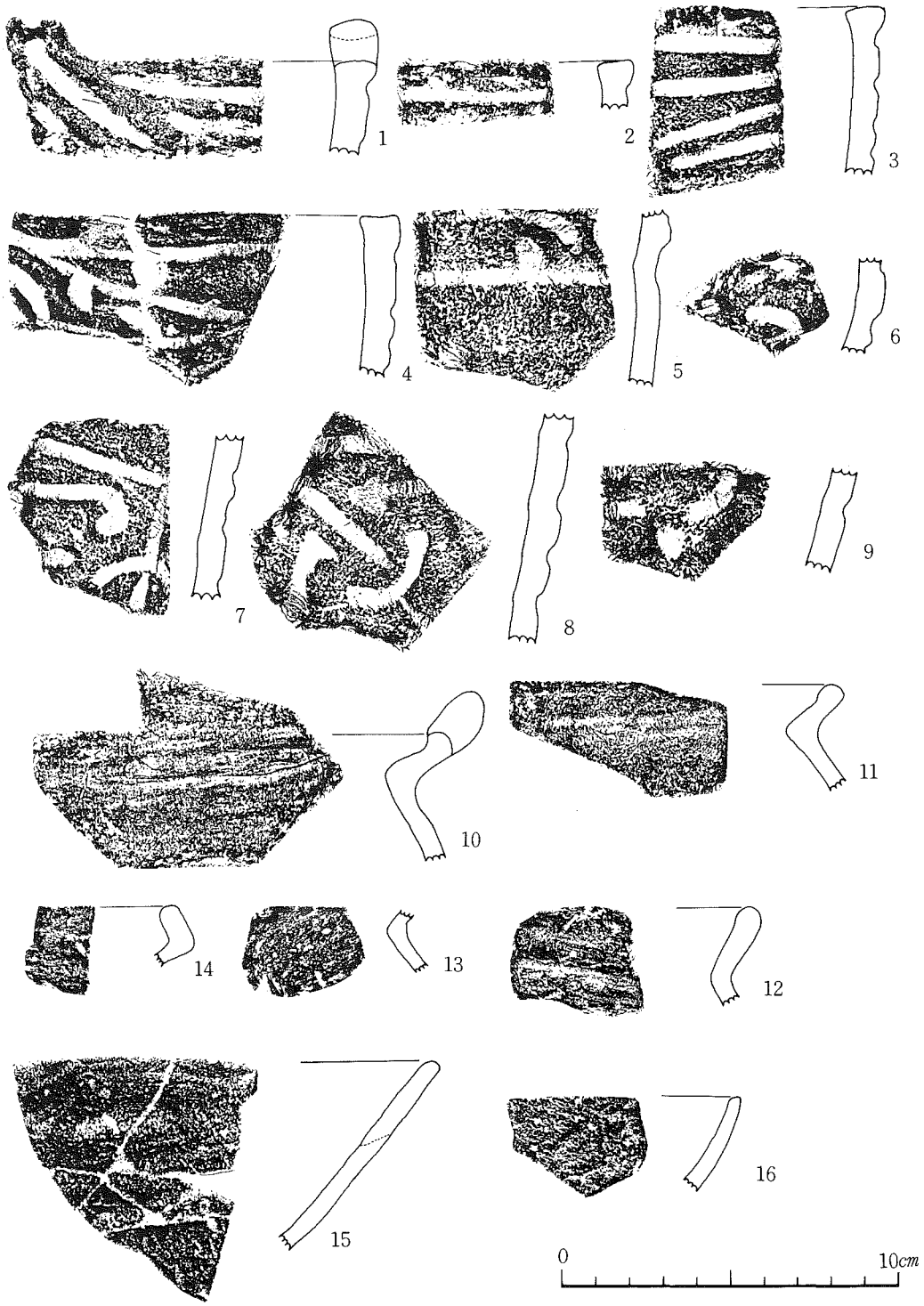
一般的に色調は褐色，又は黄褐色のものが多く，胎土には小砂粒，小石英粒を含むものが多い。又概して焼成は良好である。

口縁部器形にあまり大きな変化はなく，僅かに1が山形に隆起，2が全体的に波状を呈する他には，口縁内部に段がつく10，そして口縁が若干肥厚している13が目をひく程度である。

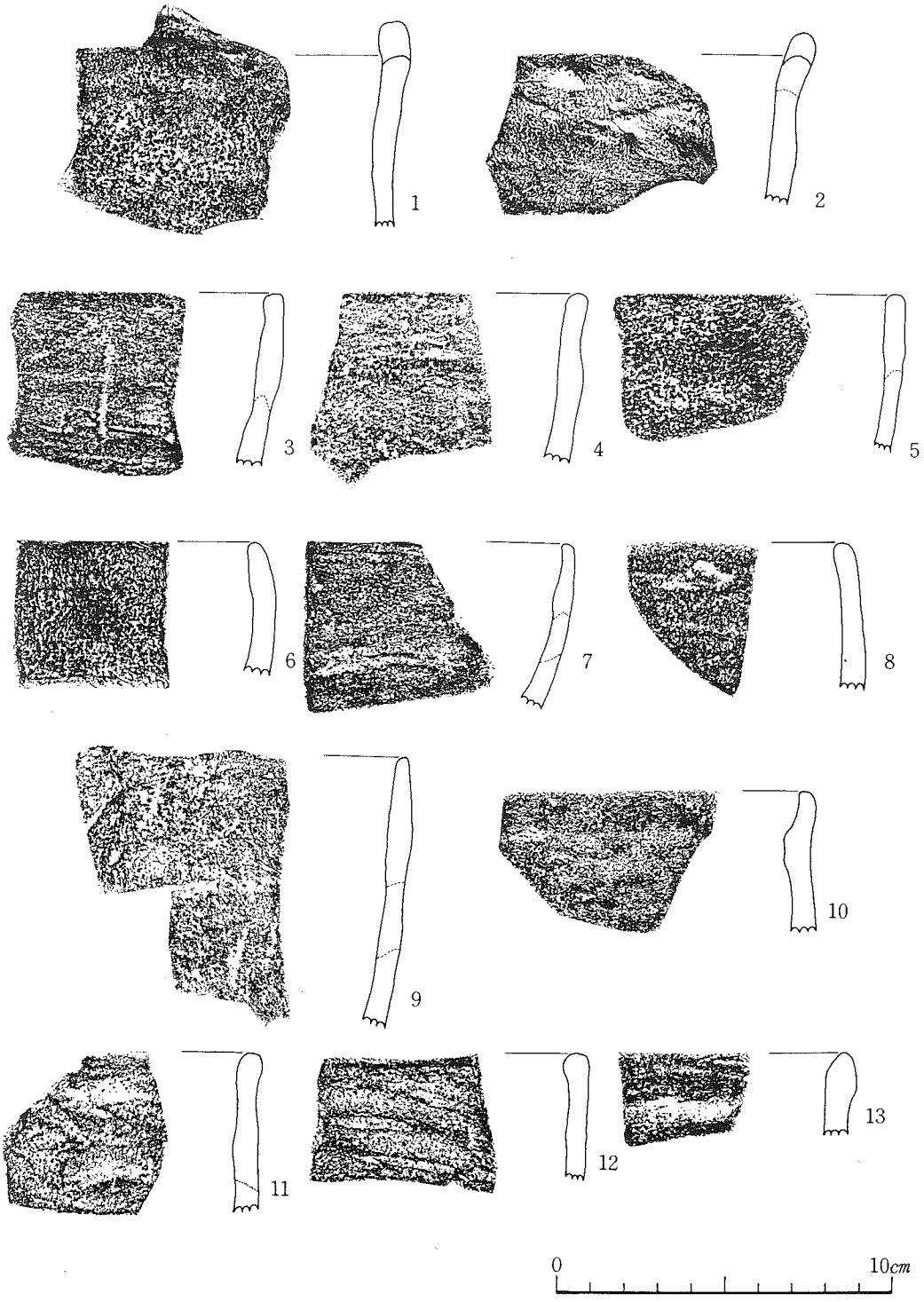
器壁調整は，12で外壁に，第19図 9 で内壁に荒い条痕がみられる。他は，ヘラ状のものでの横方向への調整痕が若干の土器でみられる程度で全体的にその明瞭なものは無い。

第19図11は肩の屈接部である。器壁は 6 ｍｍと薄く，色調は明赤褐色と，他の片に比してあざやかである。

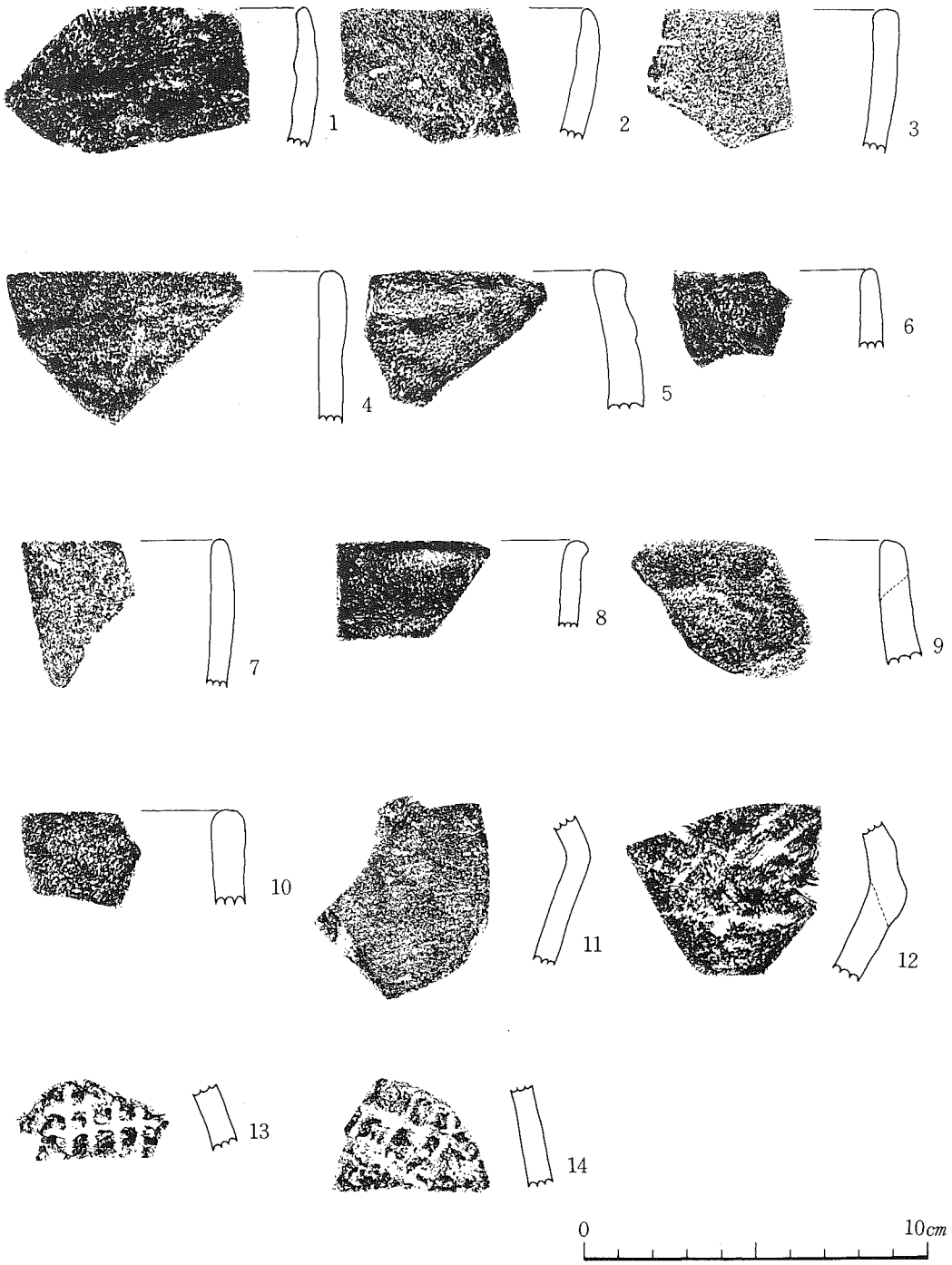
組織文土器といわれるものが3片出土している。（第19図12～14）。12は肩屈接部である。粘土の継ぎ目が明瞭で屈接部は肥厚し，突帯文への移行を暗示させる資料である。文様自体は風化と磨滅ではっきりしないが網目文であろう。13 は小破片ながら，深い網目文が印されている。14もしかりであるが12同様文様は明瞭とは言えない。これら3片に共通したものは，裏壁が黒色，あるいは黒褐色でよく精製研磨されている事である。これらの土器は，晩期Ⅱ式に始まり，晩期Ⅲ式で盛行，衰退するとの論[註2]がある。その分布は，九州西北部と南部に集中し福岡県及び大



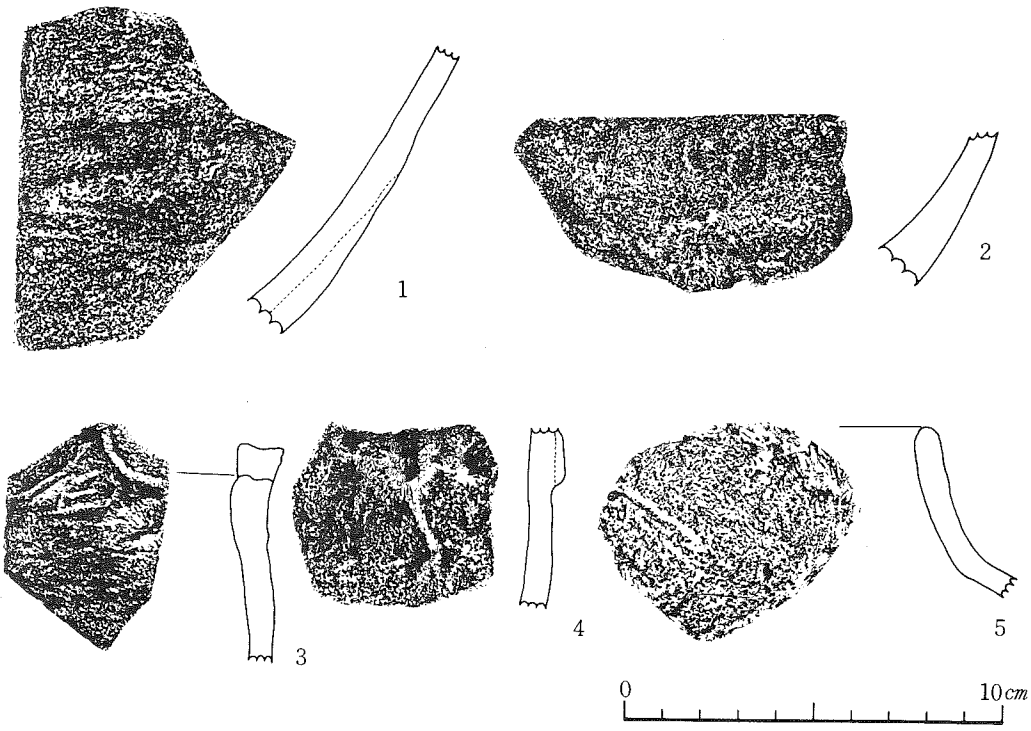
第17図　　土器拓影（中期及び晩期）



第18図　　土器拓影（晩期）



第19図　　土器拓影（晩期）



オ20図　　土器拓影（晩期及び弥生）

分県では実例がないとの事である。[註3] 五島列島に於いては初例である。

第20図1，2は深鉢底辺部である。1の下部には二次的な煤が多量に附着している。胎土には小石英粒を含み，色調は黄褐色である。

3，4は類例に乏しい為，最後に掲載しておいた。3は山形に隆起する口縁で，上縁部に添って表裏壁共一本の沈線が走る。4は表壁上に小さな細長い突帯を貼付し，その下部には不規則で浅い沈線がみられる。

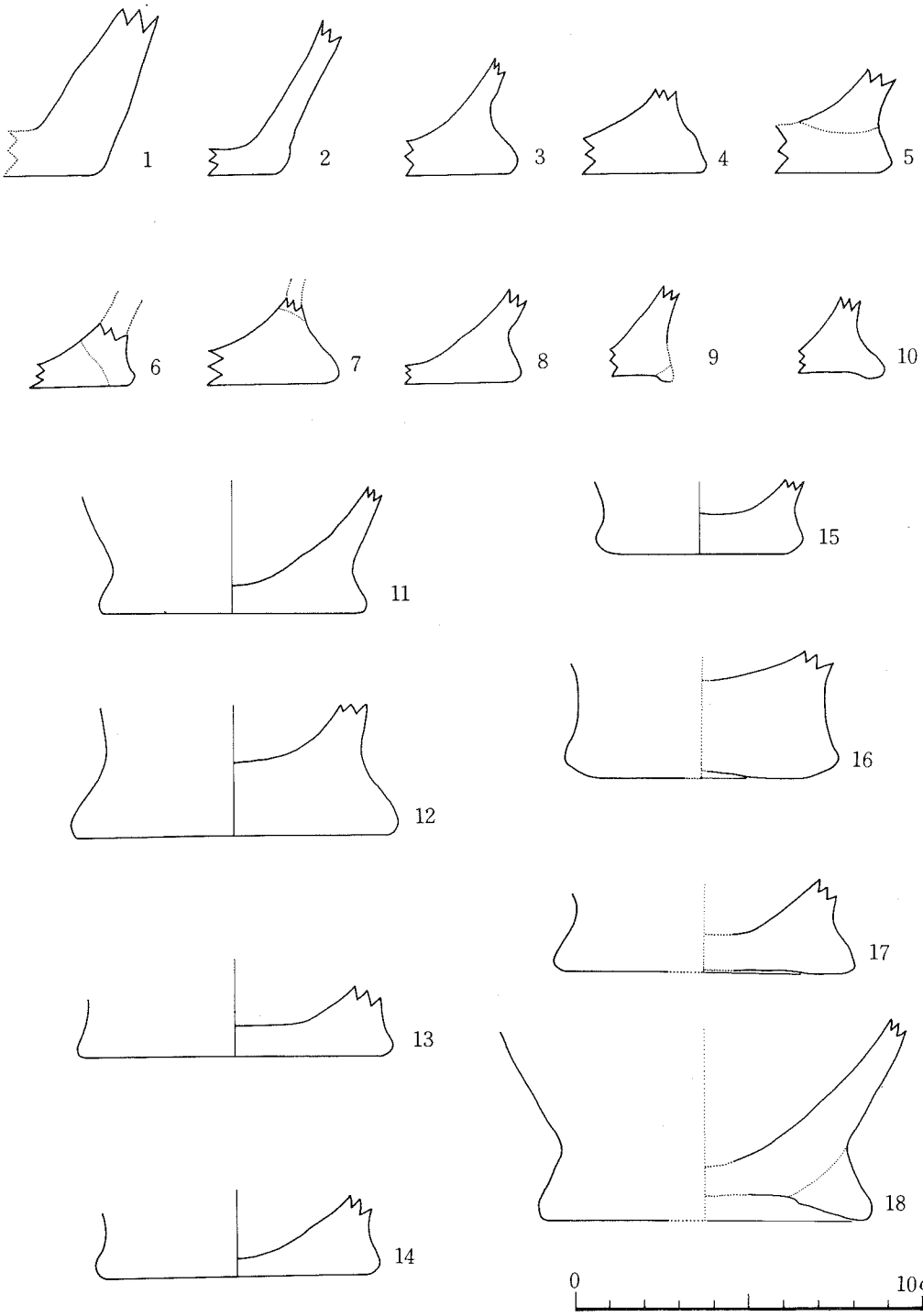
胎土，色調，焼成ともこの3，4は酷似する。同一個体であろう。

5はB－3区Ⅱ層上面より出土した弥生式土器である。攪乱気味の層であるので図示をためらったが，只1点の出土であるので合わせて報告しておく。胎土には大粒の石英を含み，ハケ目調整痕がかすかながらみえる。

底　部
（第21図）

土器出土総数1592片の内，別個体として認められる底部が28点ある。何れも深鉢で平底であるが，中には若干あげ底気味のもの（16, 17）とあげ底のもの（18）がある。

1以外のものは，胎土，色調とも似かよっており，それぞれ砂粒を含み，茶褐色か黄褐色を呈する。1は胎土に大粒の石英を含み，色調は茶褐色である。



第21図　　土器底部（晩期）

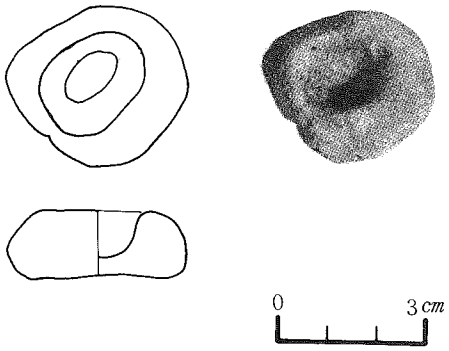
3～18は所謂円盤貼付け底部であるが，18は一端胴部と接合した後，中央部を指で削り取っている。

以上，出土土器の概要を述べて来たが，それらの時期については，文中で述べてきたように，縄文中期と晩期Ⅱ式[註4]に大別される。第21図1，2についても形状的に他のものと相異はあるが，色調，焼成等から判断すると晩期Ⅱ式に相当するものであろう。

不明土製品

最後に不明土製品を掲載しておく。

直径3cm，高さ15cm程度の円盤状のものである。中央部に径15cm程の孔をうがっているが底まで貫通はせず又もともとその目的は持っていなかったものと思われる。焼成，色調，胎土とも，今まで列挙して来た晩期土器と何ら変る事はないので，この遺跡では晩期に伴う事は確実である。A-3区第Ⅲ層中程より出土しているが，他の遺構との関連がつかみ難く，ここでは一応不明土製品として扱い，性格については他の類例を待ちたい。



第22図　不明土製品

註1.「坂の下遺跡の研究」　佐賀県立博物館調査研究書第2集　1975
2.「山の寺梶木遺跡」　古田正隆　1973
3.「原生期の織布」　鏡山　猛　九州考古学論巧　1972
4.「九州，晩期の様相と研究史」　賀川光夫　考古学講座　1969

第８章　むすび

第１表に示した中で特筆すべきは，漁撈に関する遺物が石錘の１点を除いて皆無に近い事である。通常この附近の遺跡で伴出する骨角器，礫器，魚骨，貝殻等といった遺物が見られない事も，その事実を助ける興味ある現象である。

遺跡は現在，海岸まで直線にして僅か200ｍ，標高９～10ｍの熔岩台地先端部に位置する。汀線の移動については，縄文前期で現在より－３ｍとの復元があるが[註1]，中期では資料がない。しかし島内の中期遺跡は，その殆どが現海面との比高２～４ｍに位置し[註2]，それよりみると海進時でも現在より２ｍを越える事はなかったであろう。晩期は一般的に海退期と言われるが[註3]，それがどの程度の規模であったか，福江島では計り難い。何れにしてもそれ程の大差は無かったものと思われる。

知見の限りでは，通常福江島に限らず，五島列島に散在する遺跡の多くは，大かれ少なかれ海中心の性格を有し，立地も海浜部に集中し，生活址にあっては貝塚を形成する傾向が強い。

屈曲に富む溺れ谷を形成する福江島北部の岐宿町に到っては，町全体が広大な貝塚の上に作られているといっても過言ではなかろう。

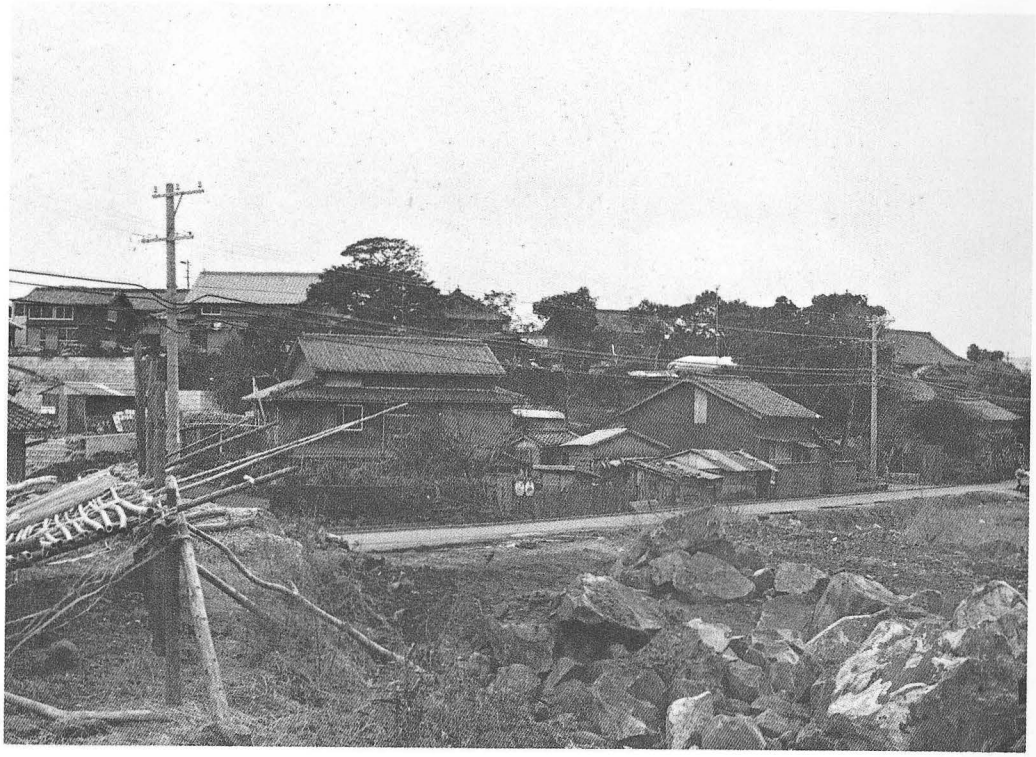
このような状況は，規模の大小はあっても島内全域で弥生中期まで継続し，その経済基盤の比重を相当の割合で海に頼っていたものと解される。

一方，福江島南部には，臼状火山群[註4]（鬼岳317ｍ，火の岳314ｍ）を中心とする熔岩台地上に，火山灰層が厚く推積した広大な台地が占拠している。近年，標高50ｍに位置する高位段丘性の遺跡が調査され，弥生終末～古墳初期の生活址が検出された[註5]。その報によれば，現地は焼畑農耕の舞台に適すとの事であり，同時に近くで縄文後晩期の土器片の発見がある事を報じている。この事は，漁撈中心の生活から一部脱却し，この広大な熔岩台地の積極的な利用を始める時期の一点が縄文晩期にあたる事を意味していよう。

水の窪遺跡が，海岸には近くとも，一応低位段丘上に位置する事は，この段丘に連なる台地利用を考えたこの時期の所産として特徴的と言えるものではあるまいか。

註１．「江湖貝塚」　坂田邦洋　1973
２．例えば，福江市浜泊遺跡は海岸との比高約３ｍ。同白浜貝塚は縄文中，弥生中期の複合遺跡で比高約２ｍである。
３．島原市では干潮日時に晩期の土器片をみる遺跡がある。「島原市の海中干潟遺跡図録」　古田正隆　1974
４．「福江市」　福江市役所企画室編　1967
５．「橘遺跡抄報」　小田富士雄　1973

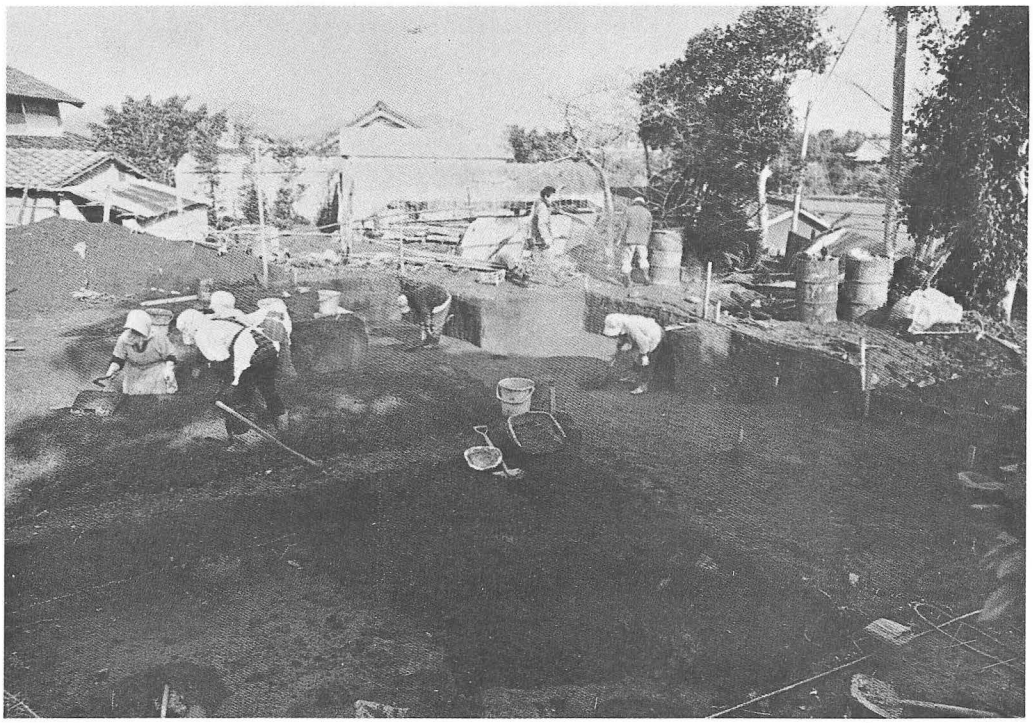
PLATE



遺 跡 遠 景

遺 跡 近 景

道路は遺跡を残して大部分完成している



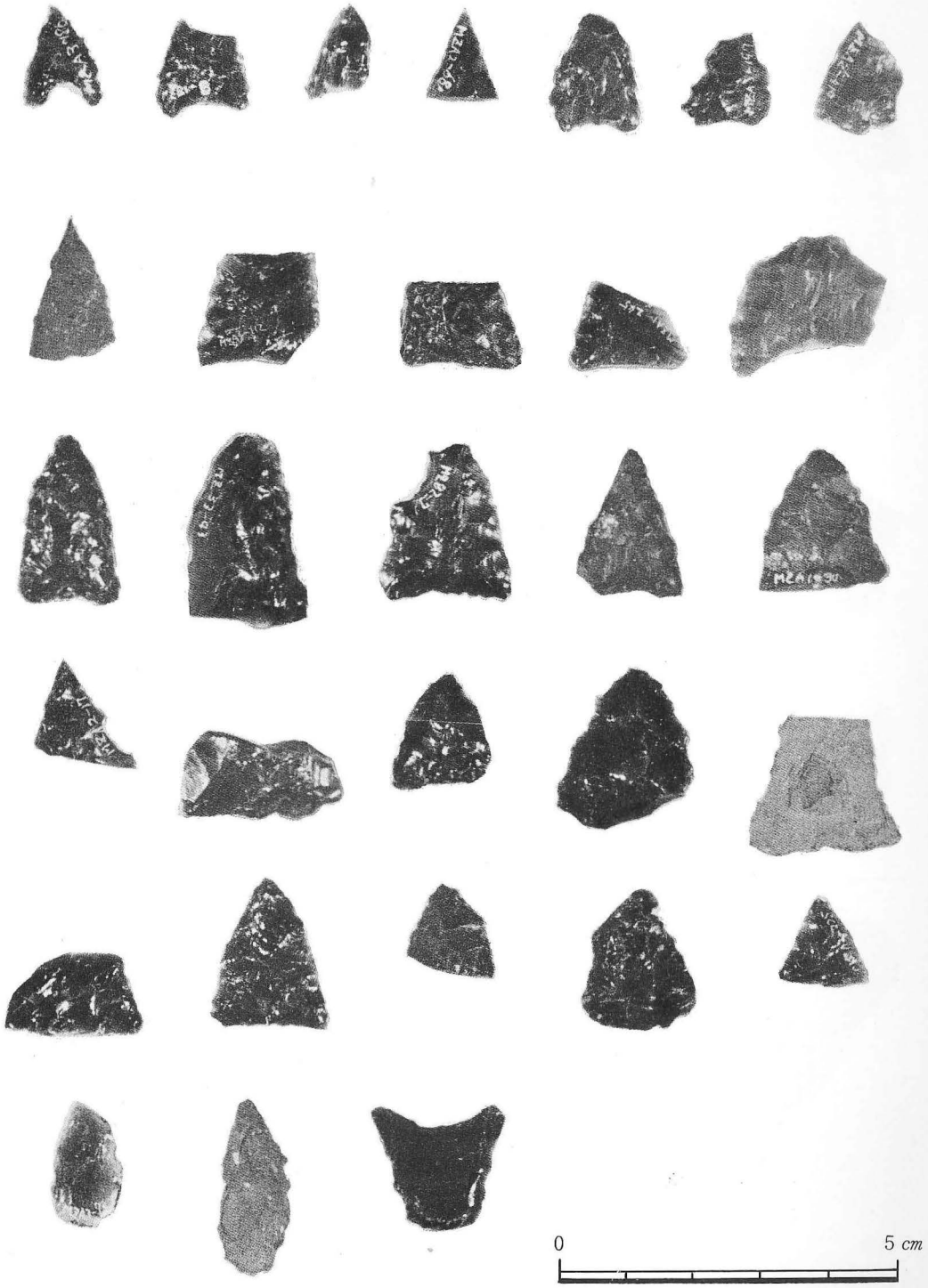
発　掘　風　景

礫群と遺物出土状況

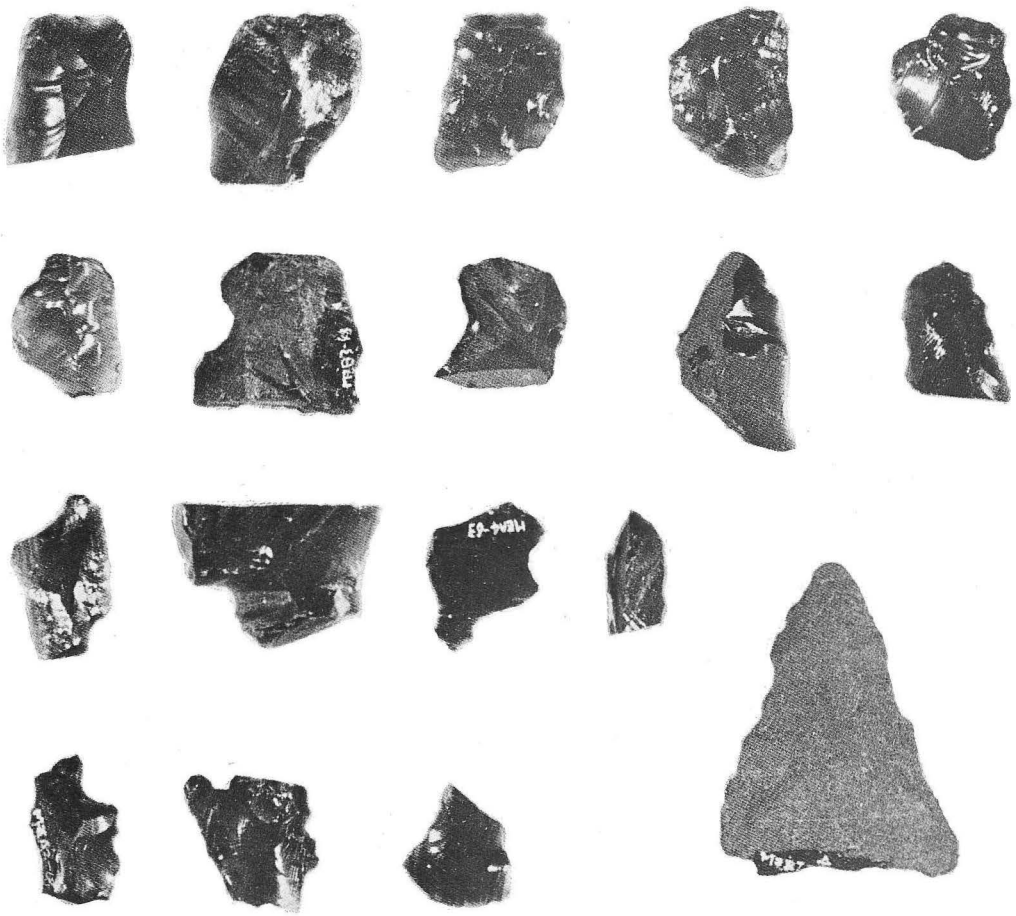
礫　群　全　景

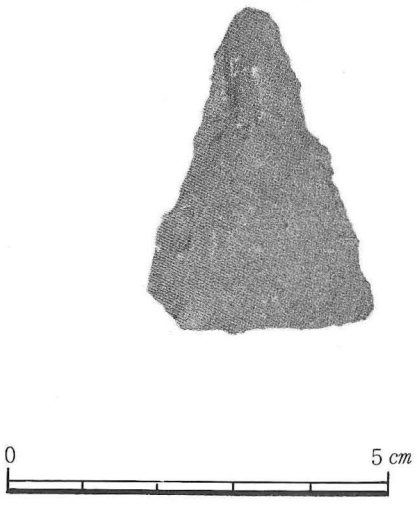
層　　序

発 掘 終 了

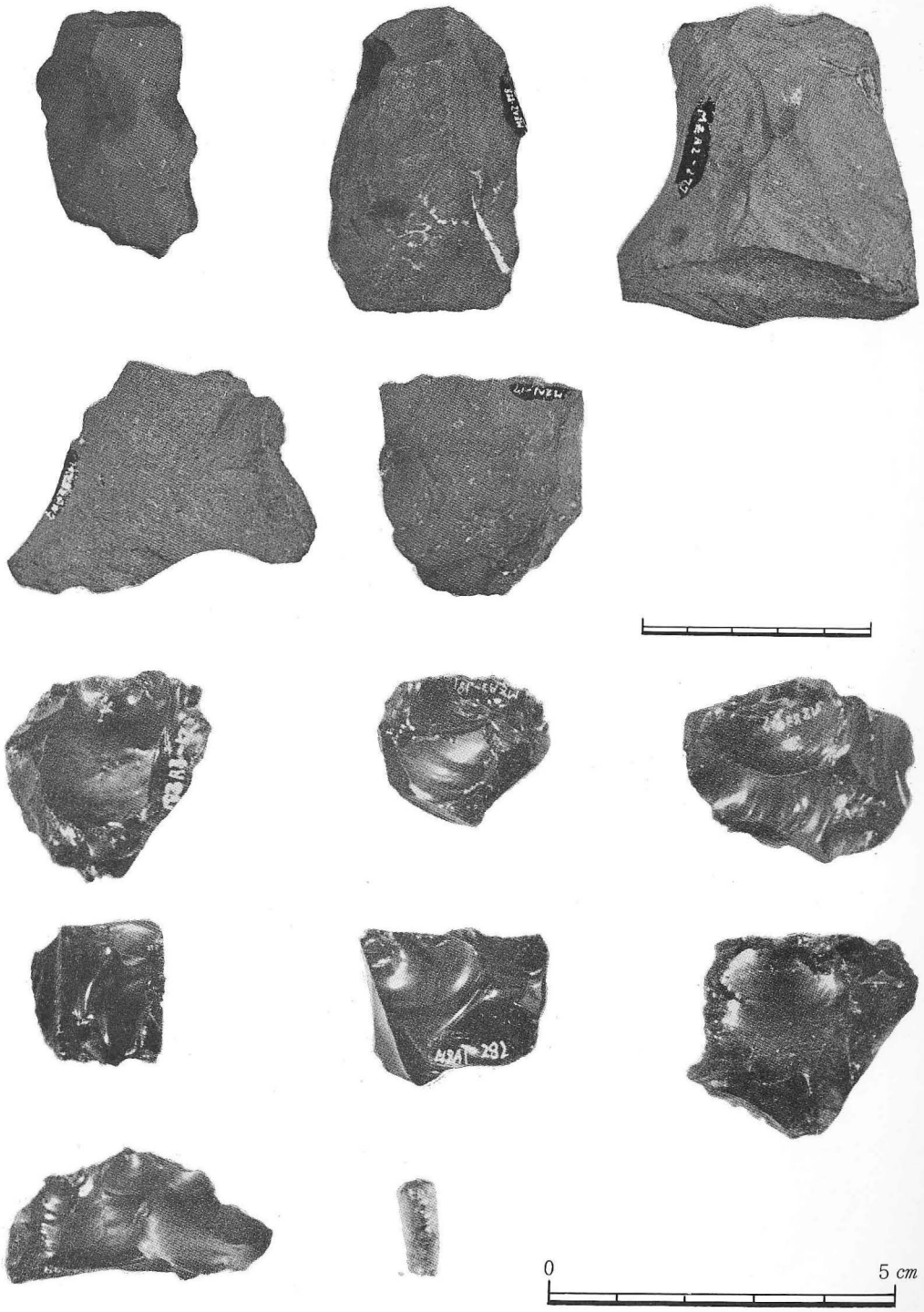


石　　鏃　　縮尺 $\frac{1}{1}$





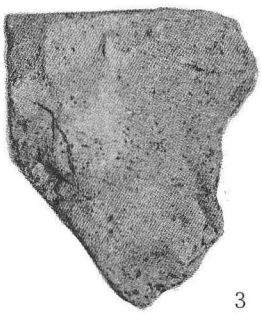
剝 片 石 器 縮尺 左下$\frac{2}{3}$ 他$\frac{1}{1}$



剝片石器（上）縮尺$\frac{2}{3}$　　石核・石刃（下）縮尺$\frac{1}{1}$

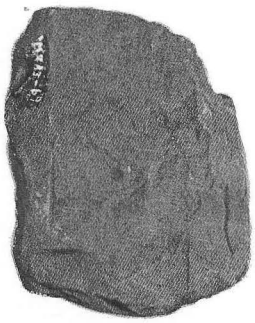
1

2

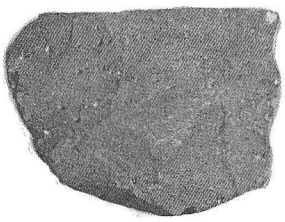


3

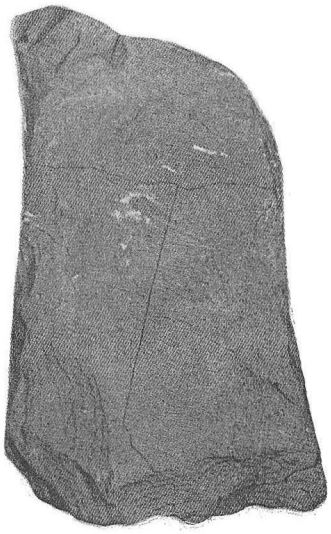
4



5



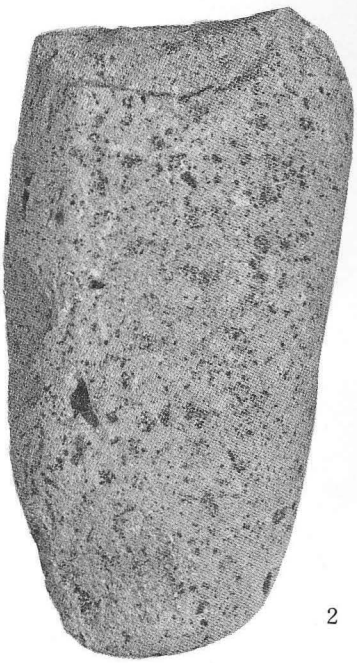
6



7

打製石斧　縮尺 $\frac{2}{3}$

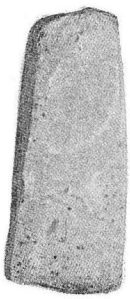
1



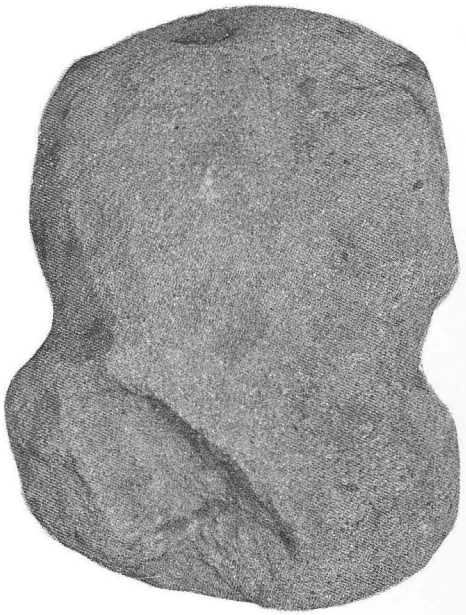
2

3

4

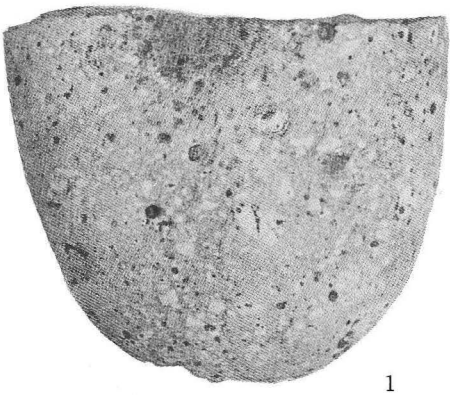


5

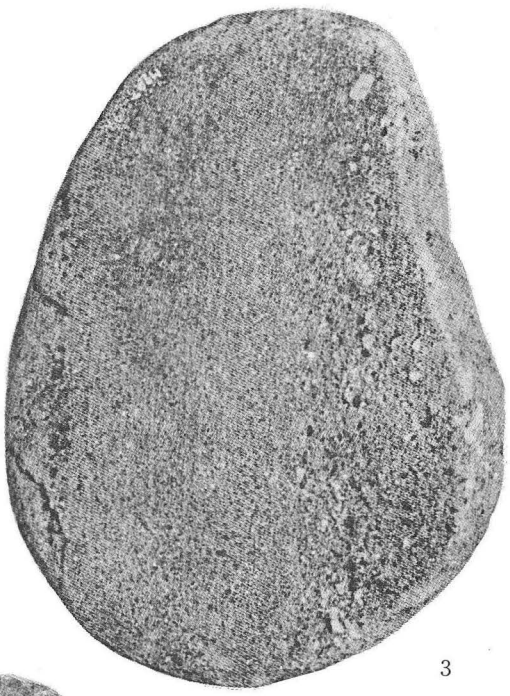


6

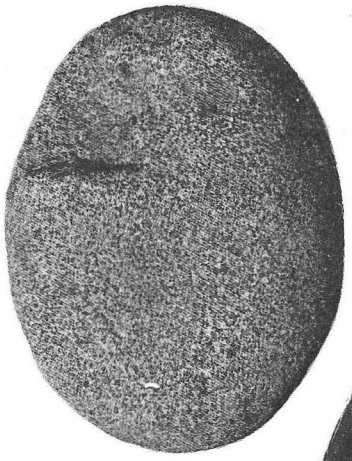
打製石斧・磨製石斧・ノミ形石器・石錘　　縮尺 $\frac{2}{3}$



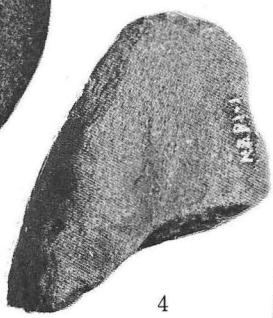
1



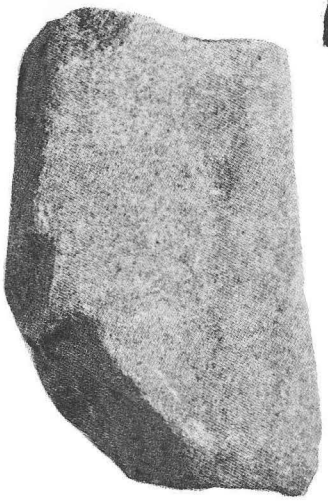
3



2



4



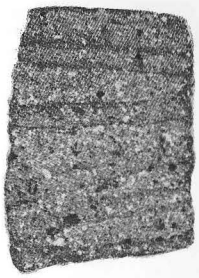
5

6

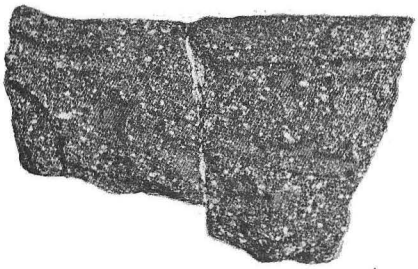
敲石・砥石　縮尺 $\frac{2}{3}$

1

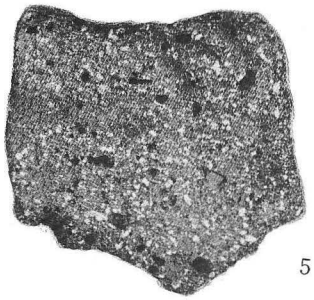
2



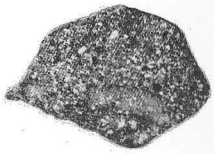
3



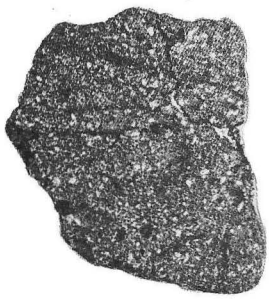
4



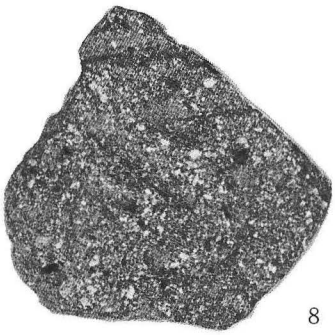
5



6

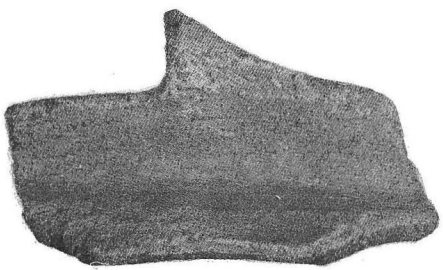


7

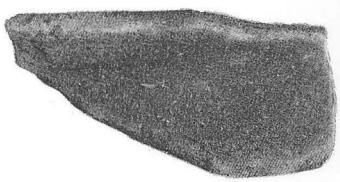


8

9

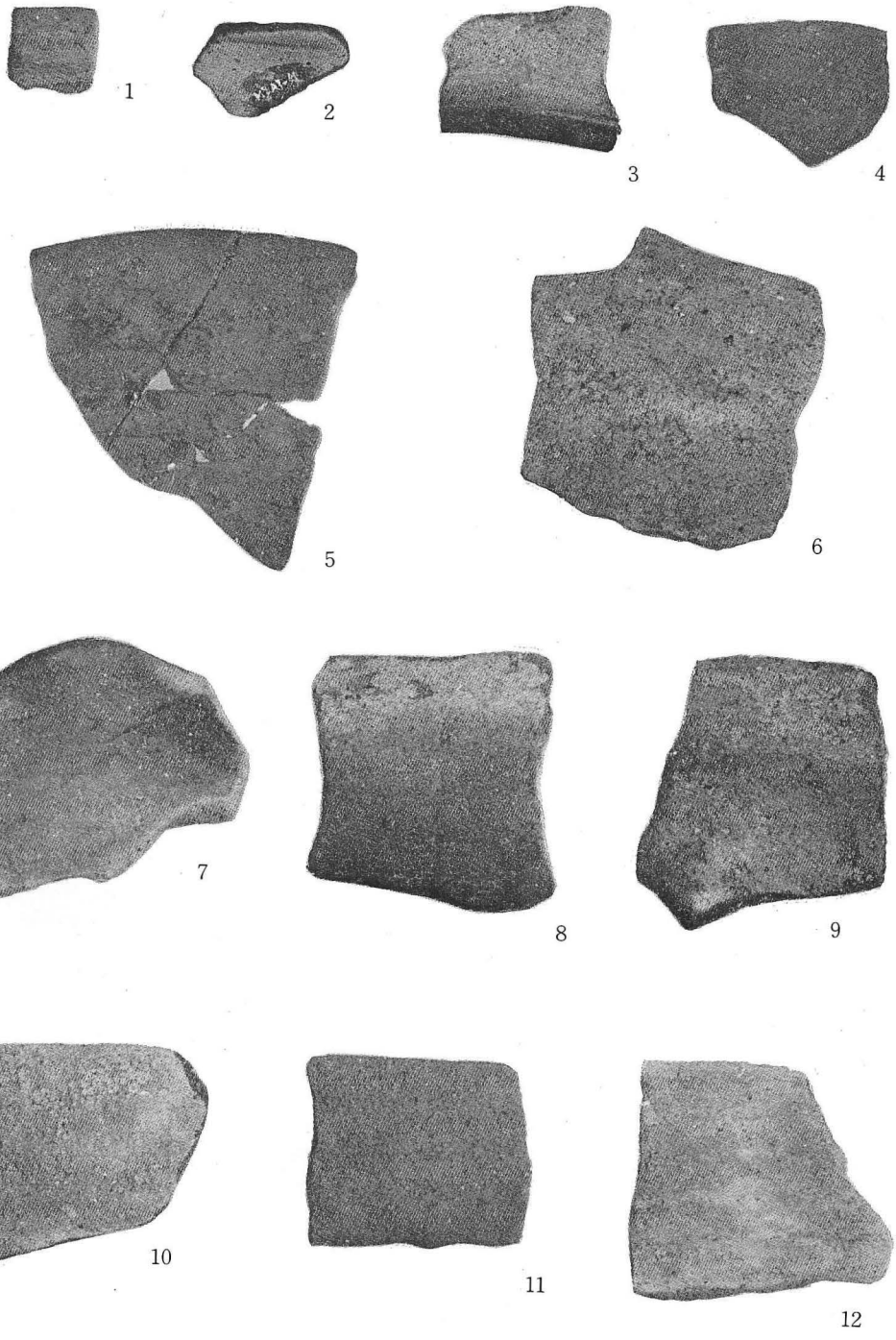


10

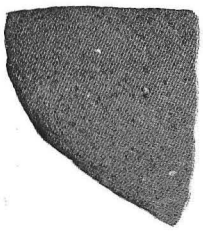


11

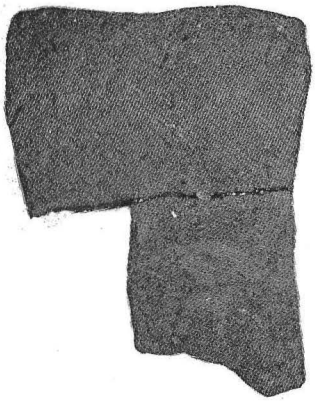
出 土 土 器　縮尺 $\frac{2}{3}$



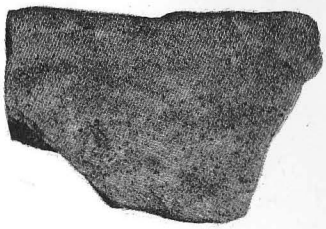
出土土器　縮尺 $\frac{2}{3}$



1

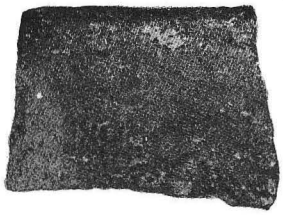


2

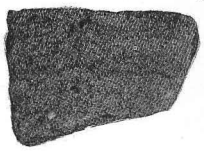


3

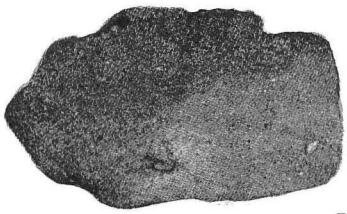
4



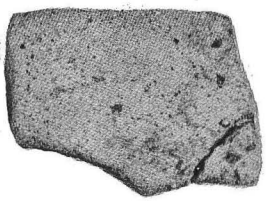
5



6

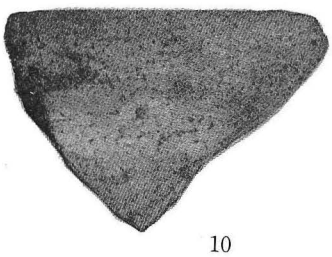


7

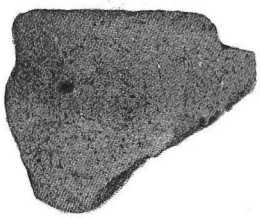


8

9



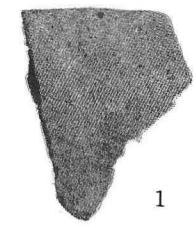
10

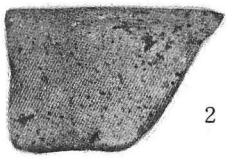


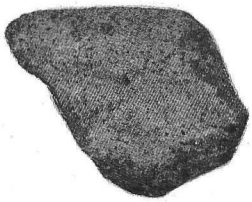
11

12

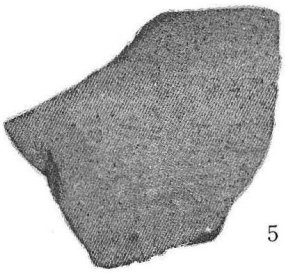
出 土 土 器　縮尺 $\frac{2}{3}$

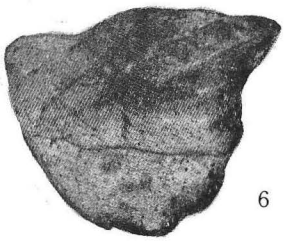

1

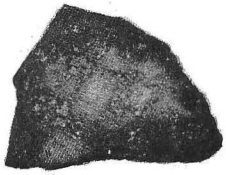

2

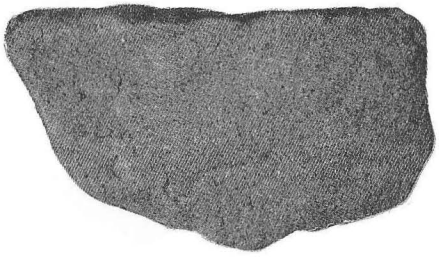

3

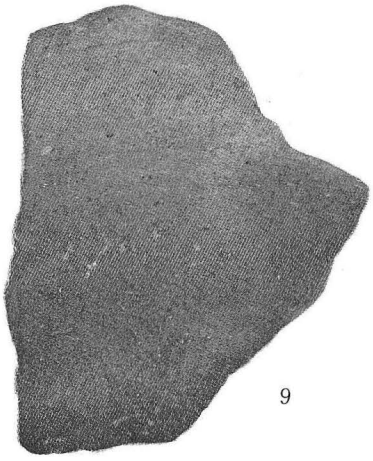
4

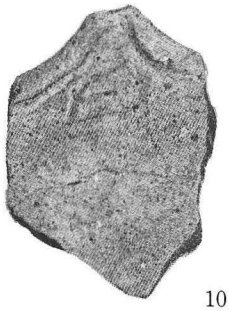

5

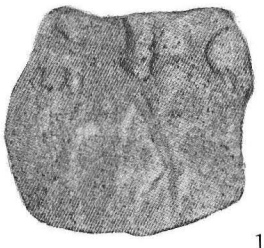

6

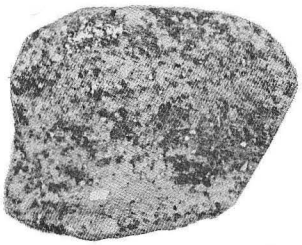

7


8

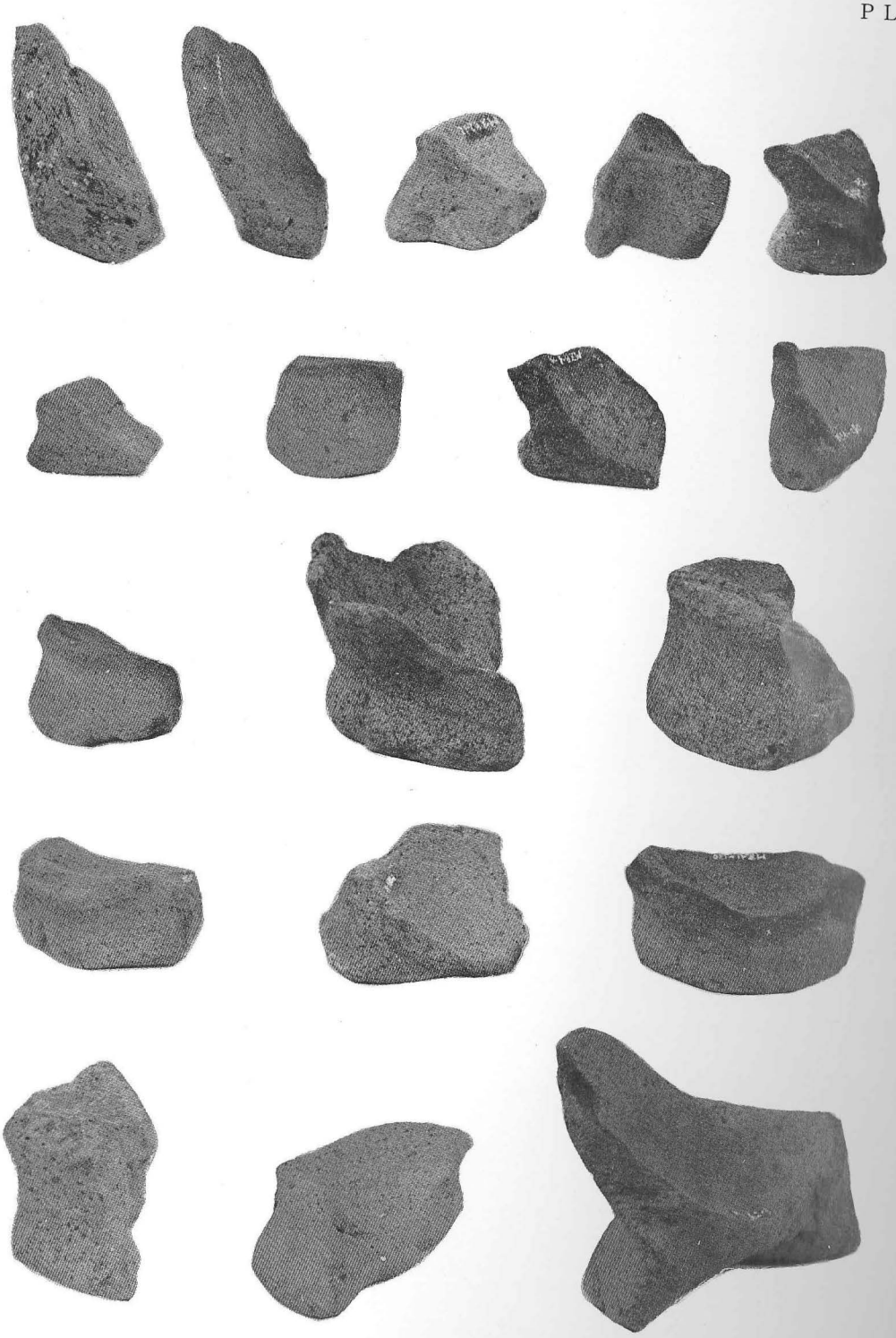

9


10


11


12

出 土 土 器　縮尺 $\frac{2}{3}$



出土土器底部　縮尺 $\frac{2}{3}$

福江市埋蔵文化財調査報告書 第1集

水 の 窪 遺 跡

1976

発 行　福江市教育委員会
印 刷　日本紙工印刷株式会社